

第15回
「私たちと北方領土」作文コンクール
入賞作文集



(北方領土返還祈念シンボル像「四島のかけ橋」)

北方領土返還要求運動富山県民会議
富山県「北方領土問題」教育者会議

目次

1 発刊にあたって……………	1	
2 受賞作文……………	2	
富山県知事賞		
富山大学人間発達科学部 附属中学校	立野 修司……………	2
北方領土問題対策協会理事長賞		
富山大学人間発達科学部 附属中学校	山口 泰成……………	3
北方領土返還要求運動富山県民会議会長賞		
黒部市立清明中学校	中陳 純人……………	5
富山県教育委員会教育長賞		
射水市立小杉中学校	野村 美緒……………	6
富山県市長会会長賞		
黒部市立明峰中学校	田原 和奏……………	8
富山県「北方領土問題」教育者会議会長賞		
黒部市立清明中学校	篠崎 綾乃……………	9
(巻末) 参考資料		
3 入賞者一覧……………		
4 作文コンクール(要項・応募状況・審査内容) ……		
入選	黒部市立清明中学校	中陳 匠……………
入選	黒部市立明峰中学校	増山 滉人……………
入選	黒部市立明峰中学校	宮下 美夢……………
入選	富山大学人間発達科学部 附属中学校	村上 留菜……………
入選	射水市立射北中学校	村山 智一……………
入選	射水市立小杉中学校	山本 麻央……………
入選	射水市立小杉中学校	清水 了佑……………
入選	射水市立小杉中学校	橋本菜桜子……………
入選	射水市立小杉中学校	安田 実央……………
入選	射水市立小杉南中学校	清水 美里……………
3 入賞者一覧……………		26
4 作文コンクール(要項・応募状況・審査内容) ……		27

発刊にあたって

北方領土は、私たち富山県民にとって先人が開拓した大切な領土であり、本県に約五百人おいでになる元島民の方々にとってはかけがえのない故郷です。しかし、戦後七十六年が経過した今日においても、依然としてロシアによる不法占拠が続けられています。

「私たちと北方領土」作文コンクールは、中学生を対象に、北方領土という日本の領土でありながら、日本人が自由に往来できない地域があるという現実を正しく理解し、関心呼び起こすことを目的に実施したもので、今回で十五回目となります。

県内全域の中学生から多数の応募をいただきました。北方領土の歴史や富山県とのかかわり、国際情勢、現在の交流の状況などを自分で調べるなど、興味と関心をもって学習している生徒が多いことに驚きました。この作文集は、そのうち十六編の入賞作品を掲載しておりますが、いづれも大変優秀な作品であり、北方領土問題の歴史的背景をしっかりと捉えていました。その上で、北方領土問題の解決方法を自分なりに考え、具体的にどうしたらよいか訴えています。どの作文からも、北方領土問題を身近な問題と捉え、若い世代が関心をもつて問題の解決に取り組んでいかなければならないという意欲が感じられました。また、残念ながら、あと一歩で入選を逃された作品の中にも、きらりと光るすばらしい作品が数多くありました。

これらの多くの作品から、北方領土問題解決の希望を託すべき次世代の皆さんが育っていることがうかがわれ、喜びにたえません。また、こうした学習を通し、生徒が国際的な場でも活躍できる力を身に付けてくれるものと期待しております。

私ども県民会議と教育者会議においては、これまで県内の全中学校に教育用DVDを、また、県内の全小学校に小学生向け学習資料のCDを配付するとともに、元島民の証言を収録したDVDを冊子化した「四島は私たちのふるさと」を県内の全小中学校に配付してきたほか、令和二年九月には、元島民や関係団体の皆様の念願であった「富山県北方領土史料室」を黒部市に整備し、昨年一周年を迎えました。この施設が返還要求運動の拠点となり、県内外の幅広い世代の皆様にご利用されることを願うとともに、引き続き、北方領土教育の一層の充実に努めていきたいと考えております。

おわりに、この作文コンクールにご協力いただきました多くの皆様方に改めて厚くお礼申しあげ、発刊の言葉といたします。

令和四年三月

北方領土返還要求運動富山県民会議

会長 五十嵐 務

富山県「北方領土問題」教育者会議

会長 愛場 幸男

新しい交流の形で

富山大学人間発達科学部附属中学校 三年 立野 修司

「子供が国の象徴を知り、敬意を払って悪いことは何もない」

こう主張したのはロシアが実効支配する北方領土・択捉島にある公立学校の校長です。今年九月の新年度から、軍出身の校長が独断で毎朝ロシア国歌を流し、教員や児童ら全員に起立姿勢で静聴させる校則を導入しました。ロシアの学校で通常こうした習慣はないそうです。

九月にこの新聞記事を読んだ時、私は背筋がゾツとしました。コロナ禍でニュースになりにくい北方領土問題でしたが、ロシアの支配がますます強まっていることに危機感を覚えたのです。

私たちが望んでいるのは「平和で安全な北方領土の返還」です。北方領土は、古くから日本人が住んでいた領土であり、先祖が汗を流して守り継いできた宝の島です。なのにどうでしょう。戦後七十六年が過ぎた今も返還が一向

に進みません。

私は、北方領土問題の早期解決には、国民一人一人が、北方領土の正しい知識を持ち、それを積極的に理解し考え、意見を共有し合うことが大切だと考えます。特に私を含め若い世代が関心を持ち、もつともつと声を挙げていくことが必要です。

そこで私は三つの活動が不可欠だと思いました。

まず一つ目は署名活動です。私も、先日黒部市の北方領土史料室を訪れ、署名をしてきました。県外からの来訪者の名前もあり、驚きました。今度は、私の家族にも史料室に来てもらい、署名をしてもらいたいです。署名は累計でなんと九千百五十三万人を超えています。

二つ目はビザなし交流です。日本人が北方領土を訪れ、その間ロシア人が日本を訪問することで相互理解や友好関係を深めるという目的の活動です。私は昨年の作文でビザなし交流の重要性を示しました。ただ、ビザなし交流は現在新型コロナウイルスの影響で二年連続活動の規模を縮小しています。

そこで、三つ目としてコロナで遠出が難しい今に最適な、SNSを使った交流です。

少し前の話ですが、二〇一四年に北方領土に住むロシア

人の青少年三十三名が、根室市と札幌市を訪問しました。若い世代の間で、交流し相互理解を深めていくという事業でした。

実際、どんな感じだったのか。お互いの言語に興味や関心を持ったたり、日本の和文化を発表したりなど、国境の壁を越えてうまく交流できていたそうです。そう、結果は大成功だったのです。

この交流事業の中でも、際立っていたのが、お互いの交流にSNSを使っていた点です。訪問が終わった後も両国の若者がSNSを通じて交流を続けていたそうです。まさに画期的です。若者同士で、新しい交流の形が生み出されていったといえるでしょう。

また、北方領土返還要求運動にはエリカちゃんの公式アカウントがあり、若者中心に問題意識をSNSで広めることができると思います。

私は形は違っても、一人一人が北方領土問題の解決に向けて何か行動していけると思います。

それぞれの国がお互いの事を知り、仲良くなること。これこそ、北方領土問題の平和的な解決方法ではないでしょうか。元島民の方々が高齢化していく中で、一刻も早く、安全で平和的に北方領土問題を解決することが求められています。

す。元島民の方の生の話を聴けるのもあとわずかかもしれません。私たち若い世代は正しい知識と関心を持ち、一国民として解決に向けて出来ることを考えていきたいです。北方領土に自由に行き来できる日が来るのを信じて。

北方領土問題対策協会理事長賞

白露の今 そして、北方領土への想い

富山大学人間発達科学部附属中学校 三年 山口 泰成

「ロシア、北方領土に特区創設へ」

大きく書かれた新聞の見出しが、僕の目に飛び込んできました。ロシアのプーチン大統領は、九月三日、北方領土に国内外の企業を誘致するため、関税を十年間免除する特別区を創設すると発表したのです。

僕は、不安を覚えました。日本以外の第三国が参入してくると、領土問題の解決は、益々遠のいてしまうのではないかと……。北方四島の経済開発を促進することで、実効支配を着実に進めるロシア。二〇二三年一月には、特区導入の可能性があると述べています。

そんな中、日本では菅首相が退陣を表明。岸田政権が誕生しました。十月末には衆議院選挙が行われ、四百六十五の議員が選ばれました。

僕は、ここで声を大にして言いたいです。

「国に、動いてほしい」

衆議院選挙の各党の演説や公約を見ると、「北方領土」についてあまり触れられていないという現実を知り、僕は唖を閉じました。そして、改めて「北方領土問題」を風化させてはいけないという強い思いが、心の奥底から突き上げるような衝動が、生まれました。

北方領土問題は、簡単に解決できる問題ではないことは、誰もがわかっています。しかし、元島民の方々は、終戦から七十六年が経った今も、大切な故郷のことを想い続け、領土返還に期待を寄せています。

「どうか、返還交渉を前に進めて欲しい」
そう、心から願っています。

コロナ禍で、島へのビザなし訪問は二年続けて中止となりました。勿論、今、日本は感染対策や経済対策が第一であることは、理解しています。しかし、僕は忘れて欲しくないのです。立ち止まって欲しくないのです。

「北方領土問題」は、決して元島民だけの問題ではありません。

ません。僕たち国民一人一人の問題です。そして、僕は政治家の皆さんには党派を超えて、「領土問題」について、もっともつと国会で活発に議論して頂きたいです。政治家の皆さんでしかできないこと、政治家の皆さんだからできることを、お願いしたいのです。

僕も、僕のできる啓発活動に取り組んでいます。コロナ禍でもできること……この北方領土に関する作文を書くことも、僕にとっては大事な活動の一つです。これによって、様々な講演会に声をかけて頂き、「領土返還」に向けての啓発活動を行うことができるようになりました。北方領土のイメージキャラクターの「エリカちゃん」と「エリオくん」人形は、共に活動をする心強い仲間です。まだまだ大きな活動はできませんが、来年僕は高校生。「北方領土学習研究会」の部活を作り、部の仲間と共に領土問題解決を議論し合ったり、啓発活動に励みたいと思っています。また、元島民の方々、そして北海道の根室高校の「北方領土根室研究会」の皆さんや、内閣府の北方対策本部の方々とも、意見交換ができればと考えています。

日本が「領土問題」に対して、受け身の体制ではなく、新たな角度から領土問題解決に向けて意見を出し合い、力強く前進できることを願っています。

返還要求運動が続いていくために

黒部市立清明中学校 三年 中陳 純人

僕は今まで様々な形で北方領土返還要求運動に関わってきました。

僕が初めに返還要求運動について深く考えるようになったのは、「北方領土青少年現地視察事業」に参加した時です。僕はこの事業で北海道の根室市を訪れ、様々な体験をする中で返還運動について多くのことを知ることができました。特に、実際にノサップ岬へ行き国後島、歯舞群島を見た時はその近さに驚き、こんなに近くても日本人は足を踏み入れることができないのかと悲しくなり、また、少し怒りも湧きました。このときの気持ちは決して忘れないようにしたいです。ノサップ岬では、四島のかげ橋と祈りの火も見ることができました。四島のかげ橋はデザインの中に北方四島がかくされているそうです。北方領土出前講座でも説明のあった、沖縄からキャラバン隊によって運ばれてきた祈りの火は、返還までの長い間ずっと燃え続けるそ

うです。決して燃え尽きない炎が、返還を絶対にあきらめない人々の心を表しているのだなと思いました。

僕は二年生のときにこの事業に参加しましたが、三年生のときにはカラーで行われた北方領土についての報告会にも参加しました。この会議では、東海・北陸地方のさまざまな中学生の話を聞き、より一層知識を深めることができました。また、自分も原稿を作り、発表する中で真剣に北方領土問題と向き合うことができたと思います。そして、どのチームの発表にもあった、「これからも返還要求運動を続けていくためには」というテーマに対しての意見もしっかりと持つことができました。

その後、学校で北方領土についてのまとめ学習があった際、僕は先ほどの「これからも返還要求運動を続けるためには」というものをテーマとして掲げました。なぜなら、現地視察事業でも報告会でも大きな課題と取り上げられていたからです。三年生の十一月には北方領土のまとめ学習の一環として、リモートで根室市の高校生の話を聞く機会がありました。そこでもやはりこの課題は上げられており、大きな課題であることを実感しました。同じときに学校で話を聞かせていただいた島民の方のお話によれば、現在元島民の方々の数は終戦時島に住んでいた数の、約三割

ほどまで少なくなっているということです。返還運動にたずさわる人が少なくなること、運動自体がなくなってしまうのではと思いました。それを回避するためにも、若い世代が返還要求運動に関わっていかなくてはなりません。長い期間に渡って返還を要求していくことで、返還に一步步近づくのではないかと思います。しかし、根室市の高校生の話によると、返還運動に興味をもつ若い世代の数は年々減少してしまっているそうです。僕はまとめ学習でどうすれば若い世代に返還運動に興味を持ってもらえるのかを考えました。一つはSNSやポスター、広報紙を使い多くの人に北方領土問題を知ってもらうことです。また、より多くの学校でまとめ学習をすることも北方領土問題について深く考えるきっかけになると思います。もう一つは北方領土問題に関連する行事やイベントに、率先して参加することです。今は一部の人たちが北方領土問題に関わるだけでも、やがては多くの人が関心を持ち、行動してくれるのではないかと思います。

今までの経験から学んだ返還要求運動の課題を克服し、自分たち若い世代が問題を解決へと進めていきたいです。

富山県教育委員会教育長賞

納沙布岬を訪れて感じたこと

射水市立小杉中学校 二年 野村 美緒

二年前に北海道方面へ家族で旅行をした。北海道は広大な土地のため、一度の旅行で全てを巡ることは難しい。北海道のどの地域を訪れるべきか、家族で話し合いが行われた。話し合いの中で、「北方領土を見てみたい」と父から意見が上がった。父は島根県出身で、幼い頃から竹島領土問題の教育を受けていたため、領土問題に対する意識が日頃から高い。父の一言で北海道道東方面へ行くことになった。

北方領土は、北海道道東に近接する、歯舞群島、色丹島、国後島及び択捉島の四つの島々から構成されている。第二次世界大戦後の一九四五年八月二十八日から九月五日までの間に、旧ソ連軍によって不法占領されるまでは、日本人が努力と苦勞の末に切り拓き、先祖代々受け継いできた、歴史的に一度も他国に支配されたことのない島々である。根室市街から車で二十分ほど走行し、三百六十度何も遮るものがない一本道を進むと根室半島先端にある納沙布

岬に到着する。まず目に入るのは、数々の石碑だ。「島を還せ」「魂 北方領土 祖国復帰は日本国民の悲願」など一つ一つじっくり見ていると、日本全国の人達の北方領土返還に対する思いが伝わってきて、なんとも言えない感情が込み上げてきた。

そして、納沙布岬の先端に立つと手に届きそうな位置に小さな岩のような島が見えた。貝殻島だ。この島と納沙布岬との距離はわずか三・七キロメートルである。島の上には日本人が昭和十二年に建てた灯台があり、旧ソ連軍に占領された後は手つかずのまま放置され、廃墟のようになっていた。貝殻島の後ろには、お盆をひっくり返したような低く独特な形の水晶島が見えた。水晶島と納沙布岬の間も七キロメートルとそう遠くはない。双眼鏡で見ると、ほんやりと低い建物、ロシアの監視場が見えた。納沙布岬とそれらの島々の間にはロシアの警備艇が時折巡航しているらしい。目前に見える日本の島々に日本人が足を踏み入れられないという現実と、ロシアによる実効支配の恐ろしさを知り、身震いを感じた。自分の国が他国に乗っ取られている異常な状態だ。日本人なら、北方領土問題について真剣に考え解決しなければならぬと思った。

どうすれば、北方領土問題が解決されるだろうか。この

問題を調べていくと、現在までに日本とロシアの間で何度か交渉が行われており、例えば、一九五六年には、国交を回復し、「平和条約締結後に歯舞群島と色丹島を引き渡す」と明記した日ソ共同宣言が署名され、一九九三年には、「北方四島の帰属問題を解決して平和条約を締結する」と記された東京宣言が合意されている。おそらく、日本とロシアの国家間における平和成立が北方領土問題解決の鍵になっていると考えられる。私の身の回りでは、ロシア人は中古車を輸出したり、学校に通い授業と一緒に受けており、日本人と同じように生活をしている。市民レベルでは、両国間で平和的關係は築けているのではないだろうか。もし、北方領土が日本に返還されたら、日本人とロシア人は平和に暮らすことが出来るはずだ。

私は納沙布岬を訪れることで、北方領土問題を知り、深く考えることが出来た。多くの日本人は、同じ日本人なのに遠い場所の難しい問題と他人事として認識し、問題解決の必要性を感じていないと思う。未来を担う私たち若者が、修学旅行などをきっかけに現地を訪れて、領土問題を正しく理解し、意見を出し合い、身近な問題として考えるべきだ。そうすることが、国や政治家が交渉するための大きな原動力になり、日本とロシアの和平成立につながると思う。

納沙布岬にそびえ立つ「きぼうの鐘」の音色のように、日本とロシアが国家レベルで清々しい関係になり、一日でも早く北方領土問題が解決されることを願っている。

富山県市長会会長賞

私たちの声

黒部市立明峰中学校 三年 田原 和奏

「北方領土を返して」

今日も、道民は訴え続ける。ある日突然奪われた自分達の故郷を返還してもらうために。

約四ヶ月。私は「総合」の時間を通して、北方領土について学ぶ機会があった。歴史的背景、特色、返還運動など様々な視点から多くのことを学んだ。中でも最も印象深かったのは神戸学院大学の岡部教授の講演だ。この講演を通して、私は北方領土返還問題への見方や考え方が大きく変化した。それほど衝撃的なものだった。内容は神戸学院大学の生徒と北方領土に住む学生達とのビザなし交流についてで、アニメ文化を通して交流していた。一番の驚き

は、「笑顔だった」ということだ。私はてっきり北方領土問題で互いに敵対しているというか、対立しているものだとばかり思っていた。しかし、そんな雰囲気は全くなく、ただひたすらに楽しそうだった。岡部教授がおっしゃっていた言葉が耳に残っている。「若い世代間の交流で互いに心を通わせ合うことこそが、北方領土返還への第一歩です。」もはや国家間の問題などではない、そう感じた。そして若い世代というのは、私たちのことを指している。「誰かがやってくれるから」なんて言って何もせずに終わるなどあつてはならないことだ。今、私たちに何ができるのか。貴重な体験を無駄にせず自ら行動したい。

北方領土はいつになれば返ってくるのだろう。北方領土に住んでいた方々はもう高齢の方が多い。もう一度故郷に帰らせてあげたい。そのためにも早急な返還が求められている。新型コロナウイルス感染拡大の影響で、ビザなし交流ができず北方領土問題の解決への道のりはまだまだ遠いように感じてしまう。それに返還の際は、今北方領土に住むロシア人への配慮も忘れてはならない。返してほしいから日本の意思を押しつけて武力行使をすれば、約八十年前の悲劇を繰り返してしまうだろう。そのため、北方領土返還には慎重な手続きが重要になってくる。また、ロシアの

若い世代の人々の多くは日本とロシアが北方領土をめぐつて対立していることを知らない。北方領土を占領しているなんて考えもせずに私たちと同じように日常を送っている。「知らない」というのは大きな問題なのではないだろうか。きつと日本人でも北方領土問題を知らない人はたくさんいる。「知らない」という人が増えてしまうと、数年後、この問題がなかったものになってしまいかもしれない。先延ばしにすればするほど返還は難しくなるだろう。そうならないために、粘り強く、何年も何年も返還を訴え続けている人々がいることを一人でも多くの人に知ってほしい。豊富な水産資源に恵まれ、美しい大自然に囲まれた北方領土。そんな故郷を奪われ、もう一度見ることが叶わず亡くなっていった人がどれだけいるだろうか。もうそんな思いを誰一人としてほしくない。

約四ヶ月、私はたくさんさんのことを学んだ。この経験を経験として終わらせるのではなくどう問題解決につなげるかを考えていかなければならない。

「北方領土を返して」

今日も、私たちは訴え続ける。北方領土が還ってくるその日まで。

富山県「北方領土問題」教育者会議会長賞

私が学んだこと〜北方領土〜

黒部市立清明中学校 三年 篠崎 綾乃

北方領土。それは、名前の通り、日本の北のはしにある島々だ。私が住む富山県とは、とても離れている。それは、どこに住む日本人にとっても、ほぼ同じ感覚だろう。おそらく、北海道に住む人以外には、北方領土は遠い存在だろう。けれども、そんな北の地域に、確かに日本人が住んでいた。彼らは、今の、ロシア人のみが住み、実質的にはロシアがもつ北方領土を、どう思っているのだろうか。

十一月九日、私の学校では、「北方領土出前講座」が開かれた。その講座では、根室高校の「北方領土研究会」に所属する根室高校一年生の二人によるお話と、元島民の方からのお話を伺った。根室高校のお二人は、北方領土についてと北方領土返還要求運動について、様々なお話をされた。その中で、北方領土の歴史についてもまとめられていた。そのお話を聞いてわかったのは、「北方領土は日本固有の領土である」という事実。そして、元島民の高齢化と

いう課題だ。当たり前だが、誰にでも平等に時は流れる。元島民の方々が年をとり、亡くなる方も増えることで、北方領土問題を伝えていく人が減少し、この問題が風化していつてしまうことがねんざされているという。そのことを知った後に、元島民の方のお話を聞くことができたので、とても貴重な経験なのだとあらためて思う。

元島民の方のお話は、興味深い内容だった。当時の生活は、とても大変だったと知った。お話をして下さった吉田さんの家は、元々、漁業を営んでおられ、魚がとれなくなったことをきっかけに、家族で歯舞群島へ移住されたそう。歯舞群島の周辺では、良質なこんぶがたくさんとれたため、そこに住む人はみんな昆布漁をしていたということも聞いた。島での思い出の中には昆布漁に係るものも多く、それほど歯舞群島で暮らしていた人々にとって昆布は、大切な収入源だったそう。そして、私が吉田さんのお話を聞いて一番印象に残ったのが、吉田さんの思いだ。吉田さんは、

「私は、『北方領土は私たちのふるさと』だと思っている。それは、今までも、これからもずっと変わらないだろう。だからこのような運動を続けている。」

学んできたが、どの文けんよりも、一番まっすぐ心に届いた。元島民の方が、北方領土の返還を求めているというところがはっきりとわかったからだろう。言葉の力だと思う。

私は、中学二年生の時に、北方領土について学ぶために、二泊三日で根室へ行くプログラムに参加しました。その旅では、のさつぶ岬を訪れ、目と鼻の先にある貝殻島を肉眼で見ました。根室の空気は冷たく、すんでいました。他にも、根室ではいくつかの北方領土についての資料を見、さまざまな人からお話を聞き、より北方領土についての見識を深めた。この経験はとてすばらしく、有難いことだった。

このように、たくさん北方領土について学んできたが、私には、何ができるだろうか。私ができるのは、北方領土問題について知らない人に、この問題を広めることだと思う。私のように、それまで北方領土問題について詳しく知らなかった人が「知る」ことから始めることで、事態は変化すると考えるからだ。そして、ゆくゆくは北方領土の返還につながることを願う。

忘れてはいけない北方領土

黒部市立清明中学校 三年 中陳 匠

「北方領土の悲劇を忘れてはいけない。」この言葉を最初に聞いたとき、私は不思議に思いました。このとき私は、歴史の授業で第二次世界大戦のことを習っていたので「戦争を起こした報いなのかな」とぼんやりとあまり深く考えませんでした。結局私は、日本のせいだと思っていました。

この考えが変わったのは、学校で調べたことからでした。私のテーマは「返還運動の歩み」についてでした。この調べ学習中に、そもそも何でロシアに占拠されたのかを調べてみると、ありえないと思うような真実がありました。「ヤルタ協定は、アメリカ、イギリス、ソ連（現在のロシア）の三国間の秘密協定であり、日本は参加していない。」ヤルタ協定は、アメリカ、イギリス、ソ連が戦争を終わらせるために結んだ協定ということは、知っていました。しかし「日本は参加していない」、「法的拘束力をもた

ない」この二つから明らかに不法占拠していることが分かります。そして腹が立ちました。不法占拠をしているロシア、そしてそのことに全く無関心だった私自身に。そして一刻でも早くこの問題に向き合わなければいけないと思いました。

「自分には何ができるんだろう。」と思っていたときに北方領土の出前講座が開かれました。根室高校の「北方領土根室研究会」の人たちと元島民の人たちが北方領土について話をされました。そこで、研究会の人たちは、根室の祭や特徴、返還運動について話していました。このときに驚いたことは、世代間の交流についてです。元島民の人たちと、私と同じ世代の中学生が一緒になって北方領土のことを伝えていくということにとっても驚きました。また、署名運動をやっていることにもとても驚きました。「私と同じ世代の人たちも北方領土のために活動しているんだ。」と思いました。元島民の人たちは、島での暮らしと願いを話していました。島では、電気や車はなく、ランプなどの原始的な生活をしていることに驚きました。今の私たちとは、全く違う生活でとても大変そうだったけど、幸せだったんだなと思いました。そして講座の最後に、「北方領土に戻りたいか」という質問がありました。「当然、戻

りたいだろうな。」と書いていましたが、「戻りたいとは思いませんね。」と言われたとき私は驚きました。しかし、その後、「ただ日本固有の領土だから返してほしい。そして返還を実現するために私たちの思いを受け継いでほしい。」と言われました。私は、特別なことをするのでなく、その思いを未来に向けて受け継いでいけばいいのだと気付きました。

北方領土返還までの道のりは遠くても、粘り強く要求を続けなければいけない、そしてこのことを忘れないようにし、後世に伝えていかなければいけないということが今回の北方領土学習で学んだことです。いつかの実現のために私たち自身が、情報を伝える存在になることが大切だと書いていました。それにならって、私自身が情報を伝える「発信源」となり、周りの友達、家族、知人、そして日本、世界へとつなげていきたいです。元島民の人たちが大切で、自然が豊かで、のどかだった北方領土は日本固有の領土であり、世界的問題の一つだと。そして、元島民の人たちが願っていた返還を少しでも早く達成させたいと思います。

入 選

「共存」していく社会

黒部市立明峰中学校 三年 増山 滉人

「北方領土」この四文字は学校、それからニュース、新聞でよく耳に入ります。そのほとんどが北方領土問題として扱っている記事ばかりでしょう。私は今までそれについて全く考えたことがありませんでした。そんなに興味もわかなかったからです。

先日、学校で北方領土に関する授業がありました。それは、これから自分達で北方領土について調べ、発表するというものでした。また、大学の教授からの話もありました。その話の中で何度も出てきた言葉があります。それは「共存」です。共存するとはどんなことなのか、どういう意味なのか全く分かりませんでした。私は北方領土を返せとさんざん言っているのに共に暮らすとは、言っていることが正反対ではないか、と思いました。

調べていくうちに「共存」の意味がやっとわかってきたような気がしました。もう北方領土はロシアの風景。ロシ

アの人、もの、建造物。だれが見てもロシアと言うでしょう。今はロシアの人々が住んでいます。それを無理矢理日本の領土にしたらどうなるか分かりますか。そう、昔、ソ連が行った「占拠」と変わリません。暮らしている人々は住む場所を失い、移住しなければなりません。また、建造物もそのままです。そんな状態で返ってきて誰が嬉しいでしょう。表面状では返っているけどふたを開けてみたら景色はロシアそのもの。私はそんなことは絶対に嫌です。だからこそ「共存」なのです。

ロシアの人々はこの問題をあまり知らないと思います。だから日本から訴えかけていくことが必要だと考えます。まず知ってもらう。それが一番大事なことだと思います。知って行動する人が一人でもいればそれは大きな進歩です。今はスマホという非常に便利な道具があります。一つ投稿すれば、瞬く間に世界中に広がります。問題を発信していくことが大切だと思います。問題を問題ととらえていない。だから興味がない。その概念をくずしていくべきだと思います。

国を動かせるのは政府ではなく国民です。私たち自身が動いていかなければいけません。私たちにできることは少なく、限られています。ですが、先程もいったとおりまず

知ることから始めていくべきです。そこから返還運動に参加したり声をあげたりすればよいと思います。知ることも大事な返還への第一歩だと思います。そして何度も言っているように「共存」これを果たしていくべきだと思います。

今はビザなし交流などが盛んに行われています。「共存」への一步を踏み出しているのです。誰かを追い出したところで誰が幸せになるのでしょうか。すなわち元からいるロシア人の方々と共に暮らし、共に生きていくことが、私が考える解決策だと思います。このまま交渉を続けたとことで還ってくるとは限りません。だから最善の策を速くうつべきだし、未来にすばらしい環境、自然を残していくためにいちはやく「共存」をはたすべきだと思います。

お互いが分かりあい、「共存」をはたせることを願っています。

故郷への思い

黒部市立明峰中学校 三年 宮下 美夢

故郷への思い。それはいつの時代になっても変わらないと私は思います。戦時中も今の時代を生きる私達にとってもです。そしてこの思いは人種が違って変わりません。私は日本とロシアの北方領土問題を解決するためには両国とも、故郷への思いは変わらないということに気付くことが最も大切だと思います。

長い世界の歴史で、北方領土は日本がロシアよりも先に発見したとなっています。実際に正保御国絵図という北方領土の島々が描かれているものが残っています。これはまぎれもない事実です。しかし、ロシア人の人達はこの事実や日本とロシアの間で何があったのかを日本とは、まったく違う形で教えられています。私は、このことを知ったときとても大きな怒りと同時に悲しみの感情がでてきました。ロシアは武力で私達日本人に屈辱や苦しみを味わわせてだけでなく、未来をつくり上げていく子供達に間違った

情報を与え続け、日本とロシアの関係を悪くする負の連鎖をつくっていました。ただただ人々を不幸にしているロシアの行動に理解が出来ません。そして、そんな行動をとってしまう人間の弱さを痛感し、悲しさ、虚しさがあふれます。でも、そんな私の思いはロシアの人達にとっては分からないと思います。なぜなら、国の教えが間違っていると気付いていないからです。

私は以前、黒部市を中心に開催された「北方領土を考える東海・北陸ブロック中学生のつどい」という行事に参加しました。様々な県の中学生達がそれぞれ北方領土について調べたことを発表し、北方領土の未来への思いを語り合いました。その中で私は、元島民の方のお話を聞き、自分が知っていたようでまったく知らなかった北方領土の一面をたくさん見つけました。しかし、私が何よりも驚いたのは、元島民の方の表情です。誰よりも楽しそうに、誰よりも寂しそうに三十分間、私達中学生に北方領土への思いを語ってくださいました。この方は、北方領土を愛しているのだと一目で分かりました。そこで、私は思いました。私が気付こうとしていなかっただけで、ロシアの人達にも同じ北方領土への熱い思いがあるのではないかと。それに気付いた途端、ロシアの人達への申し訳なさでいっぱいにな

りました。私は勝手にロシアの人達を悪者だと決めつけていました。大きな自然に囲まれ、長年住んできたところに同じ思いが生まれることなんてあたり前です。

もっとロシアと歩み寄りたい。これが今の私の願いです。私も気付けたように、戦時中も今の時代を生きる私達も人種が違って故郷への思いは変わりません。北方領土問題は、政府や内閣など国の代表同士の話し合いがほとんどです。でも、それだけでは北方領土に住んでいた人と住んでいる人との思いの伝え合いが出来ません。もっと実際に北方領土に関わりがある人達との話し合いも増えるといいと思います。そして、同じ思いに気付ければ、もう二度と武力を使うことはないし、お互いを傷つけあうこともありません。今の時代に生きる私達だからこそ今のやり方で、同じ思いを持って歩み寄りたいです。

入 選

想いを受けついで

黒部市立明峰中学校 三年 村上 留菜

私が北方領土について知ったのは、小学一年生のときでした。その頃の私は、自分が住んでいる富山県がどこにあるのかも知らなかったので、北方領土に対してほとんど興味はありませんでした。それでも私が、十年たった今おぼえているのは、戦争を経験したおじいさんの話をきいたからだと思います。

おじいさんには右手がありませんでした。戦争で兵士として戦い、なくなったのだそうです。そのころの私は、戦争があったということは知っていたけどどこか遠い昔のことのように感じていました。でも、そのような考えもおじいさんを見た瞬間に消えさりました。戦争について語るおじいさんは怒りにふるえていました。戦争は絶対にしてはいけないと心から感じたのを、今でもおぼえています。

北方領土についての問題には、日本が第二次世界大戦に負けたということが大きく関わってくると思います。もし

日本が第二次世界大戦に参戦しなかったら、もっと早く降伏していたら、北方領土は日本の領土のままだったかもしれません。しかし、今はロシアが占拠しています。今さら悔やんだって仕方のないことなのです。今の日本に生きる私たちは、北方領土を取りもどすために何ができるのかを考えなくてはならないのです。

はじめは、どうすれば北方領土が日本にもどってくるのかということを考えていました。不法占拠し続けるロシアに怒りを覚え、敵意を向けていました。

そんな中、総合の授業で現在の北方領土の写真を見ました。きれいに整備されたコンクリートの道路や、遊具がたくさんあるきれいな幼稚園など、完全にロシアの街となっていました。その写真を見るまで私は、北方領土は日本人が住んでいた頃のままだと勝手に思いこんでいました。でも、よく考えたら分かっていたはずですよ。北方領土がロシアに占領されてから七十年以上たっているのですから。それでも考えようとしなかったのは、北方領土は日本のものだと思えるしかなかったからでしょう。

北方領土は日本のものだけど、今は完全にロシアの一部となっています。だからもちろん北方領土には、たくさんロシア人が暮らしています。もし北方領土が日本に戻っ

てくることになったら、今北方領土で暮らしているロシア人を追い出すことになってしまいます。追い出されるロシア人の気持ちは、かつて同じ経験をした私たち日本人ならよく分かっているはずですよ。北方領土を取り戻すことはとても大切だけど、戻ってきたあとのことも考えていかななくてはいけないと思います。

世界的に見て日本人は謙虚だといわれています。だからといって、領土問題にまで謙虚なままで良いのでしょうか？時がたつにつれて、若い人たちの関心はうすれ、北方領土はロシアのものになろうとしています。私には、北方領土に住み暮らしていた日本の方々の想いを受けつぎ、少しでも早く戻ってくることを願うことしかできません。でも、「忘れないこと」こそが日本人の想いを一つにし、北方領土の返還につながる近道だと思います。

僕たちは、絶対に諦めない

富山大学人間発達科学部附属中学校 三年 金山 智一

「北方領土返還は無理だろう。」

父はそう言っ、僕にネット記事を見せてくれました。

そこには、ロシア社会全体で日本への北方領土返還を否定していること。北方領土にロシアがミサイルを配備していること。ロシア代表チームがサーフィン合宿を開いていることなどが書かれていました。北方領土は、第二次世界大戦後にロシアに不法に占拠された、日本固有の領土です。だから、それらが日本に返還されるのは当然のこと、いつかは日本に返ってくるだろうと思っていました。そう思っていた僕は、この記事を読んで、残念な気持ちになりました。

しかし、ある日、そんな気持ちを明るくしてくれる新聞記事を読みました。タイトルは、「北方領土の暮らし克明 白黒写真をカラー化」そこでは、北方領土での日常を捉えた白黒写真が、色彩によってリアルによみがえっていました。僕は、それらの写真を見て、北方領土での生活の

記憶が色あせないよう努力している方々がいらっしやることを知り、とても感動しました。そして、ロシアの強い姿勢に負けて、返還への強い思いをもった方々の希望を、踏みつぶしてはならないと思いました。

北方領土には、豊かな自然や広い土地、豊富な水産資源といった魅力にあふれています。だから、元島民の方々だけでなく、僕たちにとっても、必ず返還によるメリットはあるはず。ロシアの強気な態度を理由に、返還を諦め、北方領土について考えるのをやめてはいけません。

では、返還の実現に近づくために、今僕たちに何ができるでしょうか。それは、北方領土問題に関心をもち、考えたことを周りの人に伝えていくことだと思います。そうやって共感者を増やしてゆけば、きっと、大きな目標にも手が届くはず。大切なのは返還を諦めない姿勢です。ロシアの強い姿勢に負け、消極的になるのではなく、返還を実現しようと積極的に動いていくことが大切なのです。そのような行動を起こすきっかけは、僕たちの身の回りにあふれています。このコンテストだけではありません。北海道に行つて北方領土について学習するツアーも行われています。参加した友人に話を聞いてみると、元島民から直接話を聞いたり、資料館でいろいろなことを学べて楽し

かったと話してくれました。今は、実際に北方領土に行くことはできないようですが、それでも学び得たことはたくさんあったようです。

このように、何か大きなイベントを通して関心を深めることもできますが、もっと小さなことから始められます。例えば、友人や家族との会話で北方領土問題を取り上げるのも一つの方法です。僕も積極的に北方領土について話そうと心がけています。

また、問題をあまり知らない幼児や小学生にも関心をもってもらう方法はあると思います。例えば、僕の場合、オリンピック観戦を通して小学生の弟と北方領土について話すことができました。僕が出場国を地球儀を用いて教えていると、弟が北方領土を指差して名前を尋ねてきました。僕は、ここは本当は日本の領土であるにも関わらずロシアが占拠していること、難しい問題が起きていることを伝えました。弟は北方領土のことを知らなかったのですが、これを機に関心をもってもらえたようです。他にも、絵本やゲームなどを通してこの問題を伝えることができるでしょう。

北方領土問題解決への道のりは、とても厳しいものです。ロシアの強い姿勢、北方領土に住むロシア人への配慮、日本国民の消極的な姿勢といった、大きな壁が、僕た

ちの前に立ちはだかっています。しかし、それらに負け、領土問題に無関心のままだと、問題は一向に解決しないでしょう。まずは僕たちから、北方領土について考え、自分の意見を持ち、周りの人に発信していきましょう。そして、北方領土について考える仲間を増やし、広げていきましょう。諦めずに続けていけば、その思いはきっと、北方領土にも届くはずですよ。

入 選

北方領土問題を解決するために

射水市立射北中学校 三年 山本 麻央

私は歴史の教科書を見ていて、そこに載っていた二枚の写真に目が留まりました。一枚目の写真は、一九三四年ごろの国後島にあった、缶詰工場の作業場を写したものです。多くの日本の女性が働いていることが分かります。そして、その隣に載っている二枚目の写真は、二〇一一年に撮影された、現在の択捉島のもので、スーパールのレジの写真ですが、そこに日本の人は写っておらず、レジ打ちを

しているのはロシアの女性です。私はこの二枚の写真を見て、島の様子が変わったことへの驚きと疑問、そして日本の領土をロシアが奪ったと思つて怒りを感じました。それで北方領土のことを大まかに調べて、この二枚の写真が撮られた間に問題が発生して、それがまだ解決していないことを知りました。そして、その問題が発生した経緯についてももう少し踏み込んで調べました。

北方領土は日本が先に発見し、十九世紀初めには実効的支配を確立していたし、ロシアも自国の領土の南端を択捉島のすぐ北の得撫島と認識していたため、日魯通好条約では自然に成立していた両国の国境をそのまま確認しました。その後、樺太・千島交換条約やポーツマス条約で領土の受け渡しはあつたけれど、北方領土がロシアの領土になったことは一度もありませんでした。しかし、一九四五年八月九日にソ連が日ソ中立条約を破つて対日参戦すると、日本のポツダム宣言受諾後も攻撃を続け、十八日には千島列島北東端の占守島から攻めこみ、二十八日から九月五日の間に北方領土を不法占領しました。その後のサンフランシスコ平和条約で、日本は樺太の一部と千島列島に対するすべての権利を放棄したけれど、北方領土は千島列島に含まれておらず、ソ連はこの条約に署名していなくて権利を主張

することができません。日ソ共同宣言では平和条約締結交渉に同意し、平和条約の締結後に歯舞群島と色丹島は日本に引き渡すことに同意したけれど、択捉島と国後島は意見が一致する見通しが立ちませんでした。そして長い間両国の首脳が話をし、日本も交渉しているけれど平和条約がまだ締結されていなくて北方領土も返還されていません。

経緯について調べてみて、この問題はロシアの方が悪いように感じられました。しかし、思い直してみると、日本も似たようなことをしていたし、日本にも悪いところがあるのではないかと思ひました。日本も東アジアや東南アジアの国々を攻撃して植民地にしたり、そこにもともと住んでいた人が持っていた土地を奪つたりして支配していました。このことを考えると、日本が過去にしたこと、ロシアが今していることに対して、どちらの国も改めて反省することが北方領土問題を解決するための糸口になるのではないかと思ひました。また、北方領土の近くの海は海産物が豊かでよい漁場になっていたり、資源もあつたりして、自国の領土にあつたらどちらの国にとつてもよいことがあるから返還するのが難しい理由の一つになっているのではなにかと思つたので、北方領土の近くの海の家産物や資源をどちらの国も獲つてよいことにし、公平に使えるようにし

たら返還しやすくなると思いました。自分なりの解決方法を考えてみたけれど、北方領土問題にはいろいろな事情もあると思うし、返還の実現は簡単にいくものではないと思うけれど、返還が実現したら、日本の文化もロシアの文化も大切にして、北方領土の島で日本の人が再び暮らせるようになったり、地域に伝わっていた文化も再び受け継いでいけるようになったらいいと思います。

北方領土が日本に返還されて、北方領土問題が解決されてほしいと思います。そして、それが実現するまで問題を他人事だと思わず、みんなで関心を持つことが、北方領土の返還、北方領土問題への解決につながっていくと思います。

入 選

北方領土問題を学習して

射水市立小杉中学校 二年 清水 了佑

私は北方領土問題を学習して思ったことはロシア（ソビエト連邦）が一方的に占拠してきたことが良くないという

ことです。一九五一年九月八日に調印されたサンフランシスコ平和条約で日本は、樺太の一部や千島列島の権利を放棄しました。しかしそこには北方領土の四島は含まれていません。つまり北方領土は日本に領有権があります。なのにロシア（ソビエト連邦）が一方的に占拠されるのは自分の国の領土が奪われた日本としても、自分達の住む場所が無くなった元々住んでいた人達にとっても納得はいかないと思います。後に日本とソ連が国交を回復させた際、歯舞群島と色丹島を日本に返すことが合意されましたが択捉島と国後島については意見がくい違い、状況は進展してません。北方領土を全て返還を望む日本は何か解決策を行わなければいけません。そのために私が考えたものを紹介します。

まず一つ目は、北方領土のことについての経緯を知ってもらうことです。北方領土の不法占拠が始まったころの人々は歳を取ってしまい、平均年齢は八十一歳を超えています。それと同じように当時北方領土に来たロシア人も歳を取っていて今は、その息子や孫に当たる人が大半を占めているでしょう。その人たちはどのようなことがあったか詳しくは知らない人がいると思うので、ここは日本の土地なんだということを知らってもらうために北方領土の歴史を

伝えたらいいと思います。

二つ目は実際に北方領土に住むということです。今はコロナでできませんが、交流会の数をじょじょに増やしていつて泊まる日数も増やしていつて最終的に住めるようになったら良いと思います。何度も交流会を繰り返す行こうとで互いに仲も深まっていくと思います。また、アメリカなどの国では様々な国の人が住んでいるのでうまくいくと思います。北方領土に住めるようになると、元島民による墓参りなど現地ではかできないことをできるようになります。元島民の方々の願いを叶えるためにも交流を欠かさずに行うことは大切だと思います。

私は北方領土について調べていくうちに、一つの疑問が生まれました。ロシアはあれだけの面積があるのになぜわざわざ北方領土を占拠しているのかということです。調べてみるとそもそも北方領土を狙ったのは昔、ラッコの毛皮などを求め北方領土に入ってきて日本と争った結果、国境を決め北方領土は日本のものになりました。ところが一九四五年互いに攻撃しないという約束を破って攻め、日本が負けを認めても攻め続けられ北方領土は占拠されてしまいました。そしてなぜ返さないのかというと戦争で二千万人ものが亡くなったロシアにとって北方領土は小

さくても勝ち得た大事な土地とみられているからです。ロシアが不法占拠したという話を聞いてロシアがひどいと思っていました。今回調べてロシア側にも返還したくない理由があるということが分かりました。

私は今回この作文を書いて、考えの変化や新しい発見があったり北方領土問題に興味を持ったりすることができたので良かったと思いました。北方領土が返還される日がいづ来るかは分かりませんが署名活動などできることを自分もやりたいと思います。

入
選

明るい未来を切りひらいて

射水市立小杉中学校 二年 橋本菜桜子

近年、度々ニュースで取り上げられている北方領土問題。今日では、旧ソ連であるロシアが北方四島を占拠する以前に暮らしていた元島民たちの平均年齢は二〇二一年現在では八十五歳を超えている。

「何とか、私たちが生きているうちに北方領土を取り戻

したい。」そう願う住民も少なくないだろう。だが、新型コロナウイルスの影響もあり、なかなか四島との交流事業に踏み切ることができない。領土問題の関心が薄れゆく今こそ、最後の返還のチャンスではないだろうか。

日露・日ソ間では、過去四度も国境の取り決めに関する条約が交わされたが、北方領土の領有権は常に日本に帰属していた。すなわち、ロシアが北方領土の占拠をすることができるといふ法的根拠はないということになる。しかし、前述に述べたことを踏まえて、北方領土在住ロシア人全員を強制退去させ、問題解決とすることは極めて困難だ。なぜなら、北方領土の存在は、元島民たちにとって思いの故郷であると同時に、ロシア人にとっても、今の生活を支えるすみかとなっているからだ。強制退去が正式に実行されれば、多くの人々が行くあてもなく彷徨うこととなり、新たな難民が誕生してしまう。以上のことから、この案は北方領土返還には不向きであると判断した。

では、最も北方領土返還が実現に近づく打開策は、どの案なのだろうか。様々なニュース記事を読み比べ、私は一つの結論に辿り着いた。それは、元島民が北方領土に移り住み、ロシア人と共に暮らすという結論だ。現在、北方四島に日本人は一人も住んでいない。そのため、この案が実

現できれば、ロシア側が占領している事実がなくなる。日本としては、「日本固有の領土」と主張しているので、問題が全面解決したとは言えないが、両国を納得させるためにはやむをえないだろう。

北方領土に住んでいた元島民のインタビュー記事によると、第二次世界大戦後、択捉島の家を旧ソ連軍兵士が押し入ってきたという。その後、十代の姉を連れ去ろうとしたが、父親が娘を守り、そのまま兵士は家を後にしたそうだ。その時の心境を元島民は、「そのとき、私もみんなも死ぬんだと思いました」と沈痛な面持ちで語った。インタビューからも分かる通り、私たちに残された時間はあとわずかだ。我が富山県は、北方領土からの引き揚げ者が北海道に次いで多い県であるため、返還要求運動がさかんに行われている。今、私たちに求められているのは、返還要求運動の継承だ。冒頭でも述べたが、元島民は高齢者となっているため、活動がしにくくなっている。深刻な状況を、私たちが打破しなければならぬ時代がもうすぐやってくるだろう。

ここまで述べてきた持論は、あくまで理想の一部に過ぎない。七十年余り問題が解決していないのにも関わらず、社会をまだよく知らない私が堂々と語ってもいいのかとい

入 選

う不安が常に心の中にあつた。だが、そんな私にも一ツ言えることがある。それは、問題解決のために日本国民が一致団結をして動きだすべきだということだ。大多数の国民は一般人で、直接働きかけることは難しいが、祈りをささげることはできる。私もいち国民として元島民が心から笑える日が来るのを期待したいと思う。

ふるさとに鳴くセミ

射水市立小杉中学校 二年 安田 実央

「どうぞ私達家族をお守りください。」

うるさいくらいのセミの声と、焼きつけるような日差しの中、私は毎年恒例となっているお盆のお墓参りで、先祖のお墓の前で両手を合わせていた。

お墓参りは誰もがいつでも行けて、お盆に行くのは「当たり前前」なものだと思っていた。その「当たり前前」が「当たり前前ではない」と知ったのは、学校の授業で北方領土の事を聞いた時だった。

第二次世界大戦後、ロシアに北方領土が占領されてから、自由に墓参りにも行けなくなった日本人が多くいることを初めて知った。今まで当たり前だと思つてなんとなく行つていた墓参りも、当たり前ではなく幸せなことだったのだと知り、驚いた。

北方領土には一九四五年に日本が第二次世界大戦に敗れるまで日本人が大勢住んでいた。一八五五年、日本とロシアは日露和親条約を結び、日本とロシアの国境を択捉島とウルップ島の間に引き、樺太を混住の地とすることに決めた。一八七五年の樺太・千島交換条約では日露和親条約の取り決めが変更され、それまで混住の地とされていた樺太がロシアの領土になった。その代わりに、千島列島最北の島までが日本の領土とされた。その後一九〇四年に日露戦争がおこると、その翌年に日本はロシアとポーツマス条約を結び樺太の南半分を日本の領土とした。しかし第二次世界大戦末期、ロシアは「日本の領土には攻めこまない」と約束していたのに、突然南樺太と北方領土に侵入し、日本人を追い出したのだ。そのまま、現在まで占領し続けている。ロシアには法的根拠がないのに、日本が何度訴えても返してくれないのだ。これにより日本人は、墓参りにすら島へ帰れなくなってしまった。

しかしこの歴史を授業で習った後も、まだ少し私には年表の中の出来事のような、遠い外国の出来事のような感じがしていた。それまで私は「北方領土」と言われても、そういう島があることくらいしか知らなかったし、国同士の争いが難しそうで興味を持てなかったからだ。

一方で、「ロシアに突然島を追い出された日本人はどうなったのだろう」そんな疑問が頭をよぎり、私は『四島は私たちのふるさと』北方領土元島民の思い出』という本を読んでみることにした。すると、北方領土は富山県民が多く住み、富山県と繋がりが強かったことが分かり、急に身近に感じられるようになった。「なぜ移住した富山県民がいたのか」「どんな生活をしていたのか」私は北方領土に初めて興味を持ち、読み進めた。

北方領土に移り住んだのは、主に漁業などで生活を営むために出稼ぎに行った一万二千人余りの人々。富山県黒部市などからも千四百人余りの人が移住し、主にコンブ漁をして生活していた。五月から島でコンブを採り、十月の黒部市生地のお祭りに間に合うように富山に帰った。子供はコンブ漁の仕事を手伝いながらも小学校に通った。運動会には島中の人々が家族ぐるみで参加した。九月には島のお祭りがあり、皆で楽しんだ。

そこには日本の暮らしがあった。年表の中ではない、島で暮らした人々の生き生きとした生活が目につかび、北方領土は本当に日本の国だったんだという実感がわいた。同時に、突然、家やふるさとを奪われた人々の苦しみ伝わってきた。

返還に向け私達に出来ることは、元島民の「ふるさと」を返して欲しいという願い、日本固有の領土だという真実を忘れず、訴えを続けていく事だと思う。必ず「ふるさと」に帰る日が来ると信じて。そしていつか、私も北方領土に行ってみたい。できるなら日本人の墓地にお参りしたい。北方領土にもセミは鳴いているだろうか。

入 選

今、私達ができること

射水市立小杉南中学校 三年 清水 美里

私は、北方領土とは、何なのか、どこにあるのか、どのような問題が起こっているのかということは何も知りませんでした。この作文を書くということで、自分が疑問に

思っていることを調べ、私達が今、できることを考えてみようと思いました。

まず、北方領土とは、北海道根室半島の沖合にある、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四つの島々のことです。そして、これらの島々を、ロシア連邦が法的根拠なく占領し続け、これに対して、日本が返還を求めていることを北方領土問題といいます。

まず、私達ができることは、大きく分けて三つあると考えました。

一つ目は、調べるということです。調べることは、さまざまな問題を知れることの、一番大きなことだと思います。私も、この作文を書かなければ、この北方領土問題について調べもしなかったと思います。だから、疑問に思うことは、少しでも調べ、多くのことを知るチャンスを作ることが大切だと思います。

二つ目は、調べた結果から、自分の意見を持つということです。ここで、私が考えたことを述べたいと思います。

私は、この北方領土をどこの国のもの、どこの国の土地という風に決めず、日本とロシアの両方の国のものにすれば良いと思います。ロシアは国土面積が日本の約四十五倍もあります。しかし、日本はその面積に対して、たくさん

の自然や多くの遺産などがあります。このように、それぞれの国にはそれぞれの良さがあると思います。他の国より、衰えている部分があるのならば、そこを世界や他の国の人達と、協力していく必要があると思います。だから、協力し合いながら、解決するという意味を込めて、このような意見を考えました。

そして、三つ目は、このように考えた自分の意見を伝えるということです。この問題から考えられる意見は、それぞれ違うと思います。だから、お互いの意見を話し合い、考え合うことで、新しいこと、新しい考えを発見することができると思います。

私達、中学生は、まだまだ、知らないことがたくさんあります。だから、このような問題にたくさん触れ、自分の考えを持つということが大切だと思います。

「第15回『私たちと北方領土』作文コンクール」入賞者一覧

賞名	題名	名前	市町村名	学校名	学年
富山県知事賞	新しい交流の形で	立野 修司	富山市	富山大学人間 発達科学部 附属中学校	3年生
北方領土問題対策協会 理事長賞	日露の今 そして、北方領土への想い	山口 泰成	富山市	富山大学人間 発達科学部 附属中学校	3年生
北方領土返還要求運動 富山県民会議会長賞	返還要求運動が続いていくために	中陳 純人	黒部市	黒部市立清明 中学校	3年生
富山県教育委員会 教育長賞	納沙布岬を訪れて感じたこと	野村 美緒	射水市	射水市立小杉 中学校	2年生
富山県市長会会長賞	私たちの声	田原 和奏	黒部市	黒部市立明峰 中学校	3年生
富山県「北方領土問題」 教育者会議会長賞	私が学んだこと～北方領土～	篠崎 綾乃	黒部市	黒部市立清明 中学校	3年生
入 選	忘れてはいけない北方領土	中陳 匠	黒部市	黒部市立清明 中学校	3年生
入 選	「共存」していく社会	増山 滉人	黒部市	黒部市立明峰 中学校	3年生
入 選	故郷への思い	宮下 美夢	黒部市	黒部市立明峰 中学校	3年生
入 選	想いを受けついで	村上 留菜	黒部市	黒部市立明峰 中学校	3年生
入 選	僕たちは、絶対に諦めない	金山 智一	富山市	富山大学人間 発達科学部 附属中学校	3年生
入 選	北方領土問題を解決するために	山本 麻央	射水市	射水市立射北 中学校	3年生
入 選	北方領土問題を学習して	清水 了佑	射水市	射水市立小杉 中学校	2年生
入 選	明るい未来を切りひらいて	橋本菜桜子	射水市	射水市立小杉 中学校	2年生
入 選	ふるさとに鳴くセミ	安田 実央	射水市	射水市立小杉 中学校	2年生
入 選	今、私達ができること	清水 美里	射水市	射水市立小杉 南中学校	3年生

第15回「私たちと北方領土」作文コンクール

【趣 旨】 北方領土という日本の領土でありながら日本人が自由に往来できない地域があるという現実を中学生が正しく理解し、関心を引き起こすことを目的とする。

【主 催】 北方領土返還要求運動富山県民会議
富山県「北方領土問題」教育者会議

【後 援】 富山県、富山県教育委員会、独立行政法人北方領土問題対策協会、
富山県市長会、富山県町村会

【テーマ】 「北方領土に関すること」（題名は自由）

【応募方法】 (1)対 象 県内の中学校に在学している者
(2)募集期間 令和3年7月～令和3年11月24日
(3)作品規定 原稿用紙（400字詰）3枚～4枚
(4)優秀作品の選定 各中学校において優秀作品10編以内を選定し、提出する。
(5)提 出 先 北方領土返還要求運動富山県民会議

〒930-8501 富山市新総曲輪1-7 富山県経営管理部総務課内

【応募状況】

学 校 名	応 募 総 数			
	1年	2年	3年	計
黒部市立清明中学校	0	0	168	168
黒部市立明峰中学校	0	0	176	176
立山町立雄山中学校	0	0	15	15
富山市立芝園中学校	0	2	0	2
富山市立水橋中学校	0	0	1	1
富山大学人間発達科学部附属中学校	0	0	5	5
氷見市立南部中学校	0	0	1	1
射水市立新湊中学校	0	1	0	1
射水市立射北中学校	0	0	7	7
射水市立小杉中学校	0	84	0	84
射水市立小杉南中学校	4	4	2	10
合 計	4	91	375	470

【審査内容】

- 審査基準 ①北方領土問題を正しく理解されていることが表現されている、又はそのことがうかがえる。
②北方領土問題を身近な問題として捉え、自らの意見や考えが表現されていること。
③文章の構成や表現力が優れていること。
- 審査結果 26ページに掲載

「富山県北方領土史料室」のご紹介

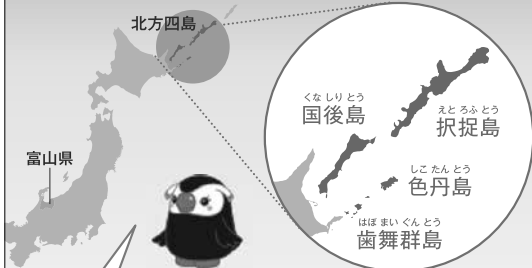
令和2年9月、北方領土問題の啓発や返還運動の後継者育成につながることを目的に、黒部市に「富山県北方領土史料室」が整備されました。

この施設が、返還要求運動の拠点となり、県内小中学校の校外学習等における活用など、県内外の幅広い世代の皆様にご利用していただきたいと思います。

知っていますか？北方領土

北方領土ってどこにあるの？

「北方領土」とは北海道の北東に浮かぶ歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の四つの島々のことで、これらの島々は、「北方四島」とも言います。



どうして富山県から北方領土へ行ったの？

富山県は、北方四島からの引揚者が北海道に多い県です。

越中(富山県)と蝦夷地(北海道)は、江戸時代には北前船交易によりすでに交流がありました。明治の終わりにになると、新しい漁場を求めて、北海道の根室や羅臼などへ富山県から大勢が出稼ぎに行き、歯舞群島や色丹島にも渡りました。自然・生活環境が厳しい中、コンブの漁場を開拓し、良質なコンブを採ることによって、多くの方が豊かな生活を手に入れました。

このように、根室や歯舞群島の漁場、とりわけコンブの漁場は、富山県の先人によって開拓され、発展したといっても過言ではありません。



北方領土からの島別引揚者数(富山県関係)

志発島	多楽島	水晶島	勇留島	色丹島	計
746人	330人	221人	59人	69人	1425人

富山県内の引揚者分布状況

黒部市	入善町	魚津市	その他	計
835人	488人	78人	24人	1425人

ご利用のご案内

- 入場料 無料
- 開館時間 9:00～16:30
- 休館日 第2日曜日、12月～3月の祝祭日
8月13日～15日、12月29日～1月3日
- 駐車場 無料(約70台)
- アクセス



- ◆あいの風とやま鉄道 黒部駅より車で約10分
- ◆北陸新幹線 黒部宇奈月温泉駅より車で約15分



- ◆北陸自動車道 黒部ICより約15分



富山県北方領土史料室

〒938-0072 富山県黒部市生地中區361
黒部市コミュニティセンター内3F
TEL 0765-57-1011 FAX 0765-54-9147

問合せ先

団体等による見学で、解説が必要な場合は、事前の申込みが必要です。下記までお問合せください。

黒部市役所 企画情報課

〒938-8555 富山県黒部市三日市1301
TEL 0765-54-2115 FAX 0765-54-4461

(北方領土返還要求運動富山県民会議 作成)



元島民の語る島の思い出

吉田 義久さん（歯舞群島(水晶島)出身)

千島歯舞諸島居住者連盟富山支部（黒部市在住）

私の生まれ育ったふるさとは、根室半島ノサップ岬よりわずか7km、すぐ目の前に見える水晶島という島です。

冬は一面雪と氷におおわれますが、春にはピンクのハマナス、スズラン、黒ユリなど美しい花々が島を埋め尽くし、小鳥がさえずる自然豊かな美しいところでした。島には2つの学校があって、1年から3年のクラスと4年から6年のクラス、高等科の3つのクラスに分けて勉強していました。

米などの農作物はほとんど育たず、仕事はコンブなどの漁業が中心でした。当時、コンブは貴重な食材だったようで、今のお金で3,000~4,000万円位の収入があったと聞いています。

島の生活は楽なものではありませんでした。コンブ漁の最盛期には、朝3時頃から船を出し、夜10時頃まで仕事をしていました。子どもでも、学校を休んで手伝いをしないとイケないのです。私は当時8歳でしたが、コンブを干す海岸の草むしりをして、ハマナスのトゲや貝殻で手を切って、血にまみれたこともありました。

冬の間は、海が氷でおおわれ漁ができないので、富山に帰って身体を養生し、春になったら島に行く人もいましたし、ずっと島で生活する人もいました。

開拓当時の生活は厳しかったようですが、時間が経つにつれ島の生活も安定していきました。漁船も新しく造り替え、これから事業が軌道に乗ろうとしていた矢先、終戦後昭和20年9月3日、ソ連軍が突然、北方四島を占領したのです。私たちは島を追われ、小舟で根室まで引き揚げました。祖父母が血と汗で築いた全財産が、そしてふるさとが、一夜にして奪われてしまったのです。

私は、戦後56年経過した平成13年夏、初めてふるさとの島を訪問しました。夢にまで見たふるさとに足をつけた時、私たちは涙でほほを濡らしました。海岸は大きく浸食されていましたが、草原が一面に広がり、草花が咲き乱れるその光景は昔と少しも変わっていませんでした。

私たち元島民は、先人の血と汗で開拓した北方四島の返還を粘り強く訴えています。誰にも故郷があります。私の故郷は北方領土なのです。日本中の皆さんに、北方領土問題を正しく理解してもらい、「法と正義」に基づいて領土問題が解決されるよう心から願っています。私たちの故郷北方領土が返還されるまで私たちの戦後は終わらないのです。

方四島には船で渡り、現地の学校や企業の視察、日本人墓地の参拝や住民との意見交換などを行っています。

◆ロシアからの訪問

北方四島在住ロシア人による日本への訪問団は、北海道内や日本各地を訪問しています。2018年（平成30年）には、59人のロシア人訪問団が富山県を訪問しました。

富山県を訪れた訪問団は、ホームビジット（一般家庭の訪問）、県内の観光地や企業、文化施設の見学、県内に住む元島民などとの交流会を行っています。

このような交流を通じて、日本人とロシア人が率直な意見を交わすことにより、相互の理解を深めています。



●ホームビジット（2018年10月 富山県）



●ロシア人訪問団との夕食交流会（2018年10月 富山県）

●富山県からの北方四島訪問事業への参加者

年	計	年	計
1993年	2人	2008年	9人
1994年	1人	2009年	3人
1995年	2人	2010年	2人
1996年	1人	2011年	6人
1997年	3人	2012年	4人
1998年	7人	2013年	19人
1999年	34人	2014年	3人
2000年	3人	2015年	3人
2001年	1人	2016年	1人
2002年	9人	2017年	3人
2003年	8人	2018年	6人
2004年	9人	2019年	25人
2005年	4人	2020年	—
2006年	20人	2021年	—
2007年	2人		
合計		190人	

●富山県を訪れた北方四島在住ロシア人訪問団の人数

区分	平成7年6月	平成14年7月	平成16年5月	平成19年10月	平成21年6月	平成30年10月
	成年訪問団	青少年訪問団	成年訪問団	成年訪問団	青少年訪問団	成年訪問団
男性	18人	17人	26人	18人	10人	24人
女性	52人	13人	49人	26人	40人	35人
計	70人	30人	75人	44人	50人	59人



北方四島との交流事業

領土問題を解決するためには、日本とロシアの国民がお互いに親近感を持ち、領土問題についての正しい理解を深めることが大切です。

そのため、1992年（平成4年）から、日本人と北方四島在住ロシア人とが相互に渡航して交流を深める事業が行われています。「パスポート（旅券）・ビザ（査証）」なしでの渡航が認められているので、「ビザなし交流」と呼ばれています。

日本からは元島民やその家族、返還運動の関係者や文化・社会等の各分野の専門家などのほか、教育関係者や中学生なども北方四島を訪問しています。

2021年（令和3年）までの30年間で、北方四島を訪問した日本人は14,356人、北方四島から日本を訪れたロシア人は10,132人、計24,488人の相互訪問が実現しています。

◆富山県からの訪問

北方領土と関わりの深い富山県は、毎年、積極的に交流に参加しています。富山県から交流事業に参加して北方四島を訪問した人は、2021年（令和3年）までに、延べ190人います。北



●日本人墓地参拝（色丹島）



●獅子舞による交流



●万華鏡作り

◆富山県民会議

富山県内では民間団体が独自に活発な返還要求運動を行ってきましたが、それらの活動を結集し、行政と一体となった返還要求運動を全県的に展開しようという気運が高まり、1982年（昭和57年）1月、「北方領土返還要求運動富山県民会議」が設立されました。

富山県民会議では、県民世論を盛り上げ、北方領土の早期返還を図るため、さまざまな活動を行っています。会員団体と協力し、毎年8月には「北方領土返還要求富山県大会」を開催し、街頭で啓発活動や署名活動を行っています。2月7日の「北方領土の日」近くには、講演会や写真パネル展などの記念事業を行っています。

◆教育者会議

児童生徒の北方領土への理解と関心を深めるため、2003年（平成15年）、県内の小中学校の教諭が中心となり「富山県『北方領土問題』教育者会議」が設立されました。

教育者会議では、北方領土教育充実のための教材作成や授業研究などに取り組んでいます。

2007年（平成19年）からは、県内の中学生を対象とした『私たちと北方領土』作文コンクールを、2017年（平成29年）からは、県内の中学校を巡回する北方領土パネル展を実施しています。



●8月「北方領土返還要求富山県大会」



●街頭キャンペーン



●「私たちと北方領土」作文コンクール表彰式



富山県における返還運動

◆千島連盟富山支部

富山県では、県内に住む元島民が、1961年（昭和36年）に「千島歯舞諸島居住者連盟富山支部」を結成し、早くから返還要求運動が進められました。千島連盟富山支部では、会員の元島民が県内各地の学校などで、島での思い出や返還への想いについて話す「出前講座」を開催しています。



●千島連盟富山支部 元島民による解説

◆復帰促進協議会

1969年（昭和44年）から1970年（昭和45年）ごろに、北洋漁場で日本の漁船がソ連にだ捕される事件が相次いだため、1970年に、富山県の漁業団体と沿岸市町村が抗議に立ち上がり、「北方領土復帰促進北洋安全操業富山県実行委員会」を結成しました。1979年（昭和54年）に「富山県北方領土復帰促進協議会」に改称し、ニューヨークの国連本部へ北方領土返還実現を要望するなどの運動を展開しました。

また、他都府県に先がけて、1970年から毎年、中学生を北海道へ派遣しています。2019年（令和元年）で第50回を数え、これまで中学生373人が納沙布岬から北方領土を望見しました。



●北方領土復帰促進北洋安全操業
富山県大会パレード（1970年 黒部市）



●復帰促進協議会
「青少年北海道派遣団」の結団式

条件で干場の権利を借りることができたのです。

島の住民が北方領土から引き揚げた後に居住した場所を市町村別にみると、ほとんどが黒部市と入善町に集中しており、9割以上を占めています。黒部市では生地地区、入善町では芦崎地区に、多くの人が引き揚げてきました。地域的には、黒部川の河口をはさんだ沿岸地域に集中しています。次いで、魚津市の経田地区が多く、その他では、滑川市や射水市にも元島民がいます。

黒部市出身者は、志発島を中心に多楽島や水晶島など歯舞群島の全域に広く分布していました。それに対し、入善町出身者は、志発島へ集中的に渡っていました。

島に渡った時期ですが、歯舞群島では、大正時代の中ごろから1935年(昭和10年)までに多くの世帯が渡島しました。

●富山県内の引揚者分布状況

黒部市	入善町	魚津市	その他	計
835	488	78	24	1,425

富山県への引揚者数(元島民)は1,425人でしたが、すでに900人以上が、ふるさとの島へ帰ることなく、無念のうちに亡くなられ、令和3年3月末現在は470人となっています。

富山県は北海道に次いで北方領土からの引揚者が多いんだね。

滋賀県	京都府	大阪府	兵庫県	奈良県	和歌山県	鳥取県	島根県	岡山県	広島県	山口県	徳島県	香川県	愛媛県	高知県	福岡県	佐賀県	長崎県	熊本県	大分県	宮崎県	鹿児島県	沖縄県	海外
5	6	42	26	4	3	2	1	7	12	0	0	4	1	1	2	0	2	2	7	3	2	0	21

◆北方領土に渡った富山県民の人数

第二次世界大戦終了後、北方領土を占領したソ連軍は、島の住民を強制的に立ち退かせました。その際に、北方領土から富山県に引き揚げてきた人数は、1,425人だったとみられています。

引き揚げてきた人々が住んでいた島をみると、歯舞群島と色丹島に集中しています。とりわけ、歯舞群島から多くの人々が引き揚げてきました。

富山県人が歯舞群島に集中した理由としては、歯舞群島が北海道本島の根室に比較的近い島であるため、1877年（明治10年）以降から根室に行っていた富山県人によって開拓されていたことが考えられます。

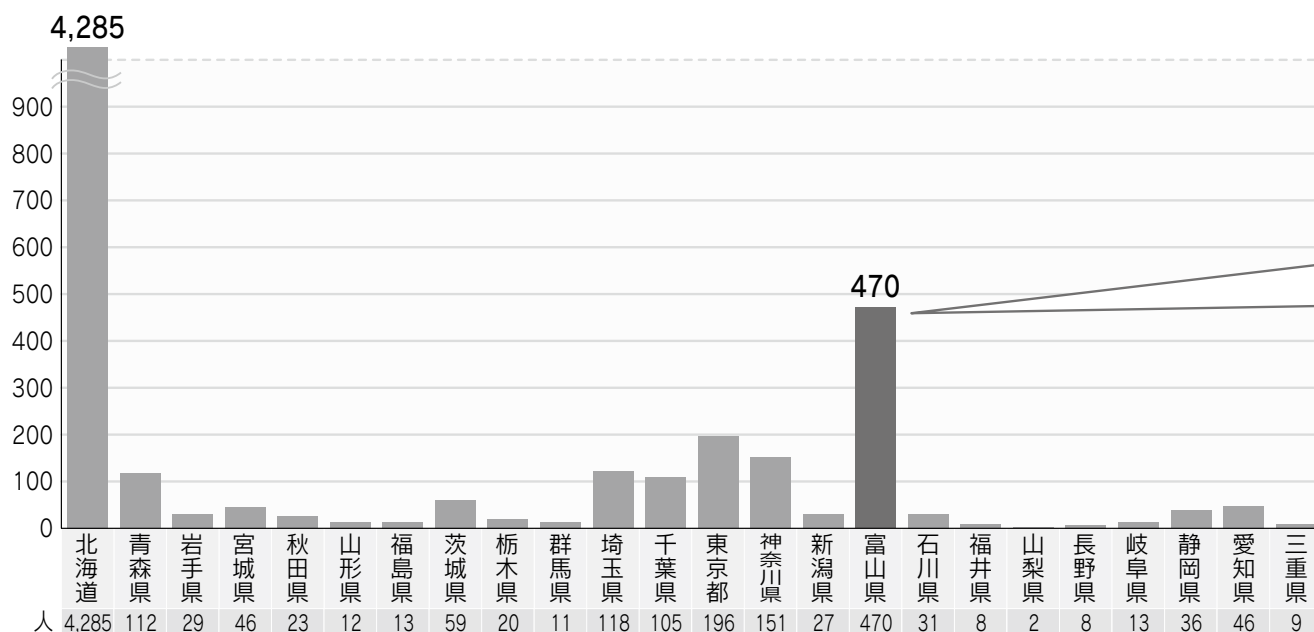
歯舞群島でコンブ採取や漁業を行うためには、コンブの干場の権利を持ち、根室または歯舞の漁業組合の組合員であることが必要でした。富山県からきた出稼ぎ者は、根室や島にいた富山県出身の親方（網元）から、有利な

●北方領土からの島別引揚者数（富山県関係）

志発島	多楽島	水晶島	勇留島	色丹島	計
746	330	221	59	69	1,425

志発島、多楽島、水晶島、勇留島は全て、歯舞群島に含まれます。

●北方領土の元島民数 令和3年(2021年)3月末現在数



◆コンブ漁

歯舞群島や色丹島の住民のほとんどは、コンブ漁に従事していました。

コンブ漁の仕事は、厳しく大変なものでした。朝は5時ごろから始まり、夜は月が高く上るまで家族全員が働くのです。子どもたちも手伝いました。島ではたくさんのコンブが採れ、全国に運ばれました。富山県から島に渡った人々は、持ち前の粘り強さを発揮してコンブ漁を盛んにしていきました。

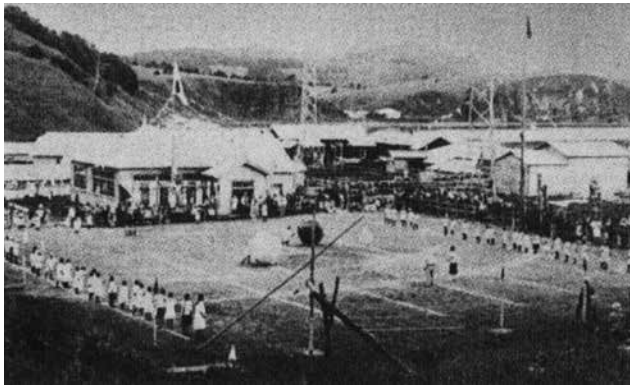
島ではジャガイモなどは採れましたが、米はほとんど育たず、米、みそ、しょう油などの品物は、富山県から送ってもらっていました。

島では、小学校の運動会や学芸会、神社の祭礼などが大変にぎやかに行われ、ほとんどの人が仕事を休んで集まり、楽しい一日を過ごしたそうです。

冬は、海が雪と氷でおおわれてしまい、コンブ漁ができない上に、寒さが厳しいので、富山県に帰って体を休め、春になってから島へ戻る人たちもいました。富山県から島までは、鉄道と船を乗り継いで1週間以上かかりました。



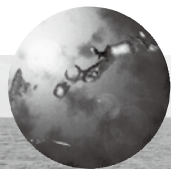
●コンブ干しの風景（国後島）



●小学校での運動会（色丹小学校／色丹島）



●お祭りの光景（国後島）



富山県と北方領土とのががわり

富山県は、北方領土からの引揚者が北海道に次いで多い県です。

越中（富山県）と蝦夷地（北海道）とは、すでに江戸時代には交流がありました。北前船で日本海側を通る西廻り航路により、蝦夷地から大量のコンブが大阪に運ばれていました。その航路は「コンブロード」と呼ばれていました。富山は、「コンブロード」の中継地として発展していたのです。

また、当時の富山県を治めていた加賀藩は、漁師の出稼ぎを奨励していました。代々、神通川以東の33カ村の浦方十村（漁村の大庄屋）であった田村家の7代目である田村前名が、1818年（文政元年）に遠洋漁業を広めたとの記録も残っています。

1874年（明治7年）には、生地村（現在の黒部市内）の人々が北海道へ出稼ぎに行き、大きな利益を得たため、それ以降、出稼ぎに行く人々が増えていったとのことでした。

明治の終わりごろになると、富山県では、漁業不振と高波や火災による災害のため、漁師の生活は苦しいものになっていました。そのため、新しい漁業の場を求めて、すでに北海道の根室や羅臼で漁業経営者になっていた富山県出身者を頼って、大勢が出稼ぎに行きました。彼らは、「富山からの出稼ぎ者は、真面目によく働く」と言われ歓迎されたそうです。漁師たちは、歯舞群島にも渡り、自然や生活環境が厳しい中、コンブの漁場を開拓していきました。良質なコンブがたくさん採れ、多くの人々が豊かな生活を手に入れました。

大正時代になると、富山県から歯舞群島や色丹島に移り住む人も増え、「越中村」と呼ばれる村ができるくらいでした。

このように、根室や歯舞群島の漁場、とりわけコンブの漁場は、富山県の先人によって開拓され、発展したと言っても過言ではありません。北方領土へ渡った人々が支えたコンブは、現在の富山の食文化にも深く関わっています。



◆返還運動のひろがり

北方領土の返還を求める人たちの間から、返還運動を一層推進するため、「北方領土の日」を制定したいという要望が高まり、1981年（昭和56年）、政府は2月7日を「北方領土の日」とすることを決定しました。

1855年（安政元年）の2月7日は、日本とロシアの間で最初に国境の取り決めが行われた「日魯通好条約」が結ばれた歴史的に大きな意義を持つ日です。

毎年、「北方領土の日」には、東京で「北方領土返還要求全国大会」が、内閣総理大臣、衆・参両院議長、各政党代表、民間団体代表などの出席のもとに開催されます。全国各地でも、この日を中心に、大会やパネル展、講演会などの行事が行われます。

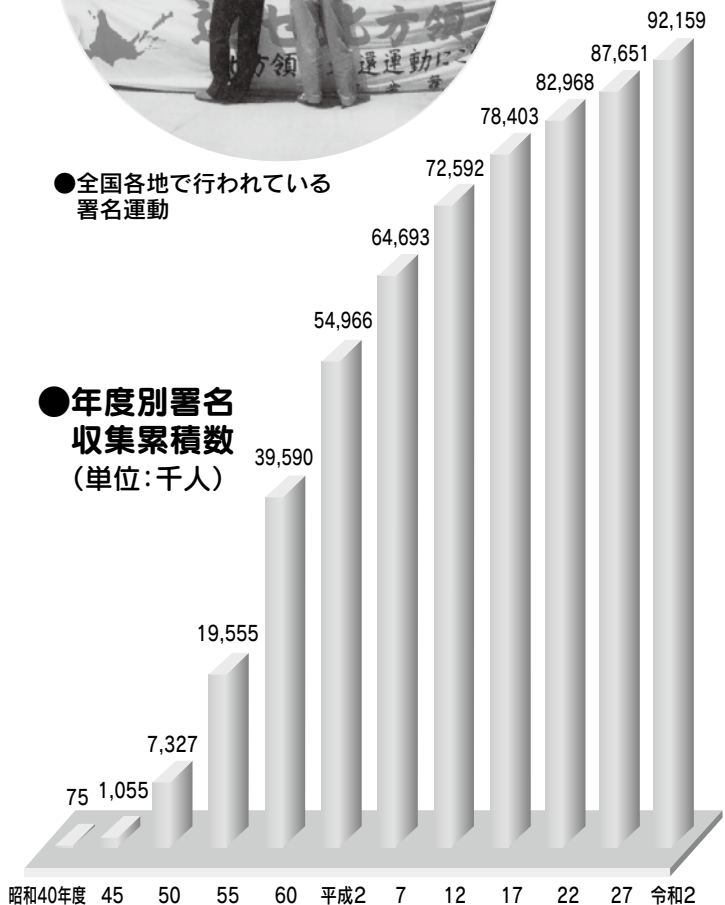
また、国民が北方領土返還を求めている意志を表明する手段として、署名活動が行われています。多くの人たちから寄せられた署名は、令和2年度末現在で9,215万人を超えています。



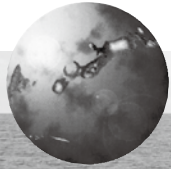
●北方領土返還要求全国大会（挨拶する岸田総理）
出典：首相官邸ホームページ



●全国各地で行われている署名運動



●年度別署名収集累積数
(単位：千人)



どうしたら北方領土は還ってくるの？

◆北方領土返還運動のあゆみ

北方領土問題を解決するためには、ロシアとの外交交渉を粘り強く続けることが必要です。こうした交渉を支えるのは、返還を求める国民の一致した世論と強い支持です。

北方領土の返還を求める声は、第二次世界大戦終了後まもなく、北海道の根室にあがりましました。当時の安藤石典根室町長は、ソ連によって島から追われた人たちの援護に全力をあげるばかりでなく、当時の日本を占領していた連合軍最高司令官であるマッカーサー元帥あてに、北方領土返還を求める陳情書を出しました。これが、返還要求運動の始まりとされています。

根室であがった返還要求の声は、やがて北海道の各地にこだまし、運動の輪は全国に広がりました。多くの民間団体が返還運動に取り組み、運動の基盤となる都道府県単位の組織が設立されていきました。北方領土返還の実現を目指した運動は、全国各地で大きく展開されるようになっていくのです。



●北方領土復帰要請陳情書第1号



●全国縦断キャラバン隊の要望書を総理大臣へ伝達



●国際シンポジウム2004（富山会場）



日口間の最近の動きはどうなっているの？

1991年（平成3年）にソ連が崩壊し、ロシアが誕生しました。日本とロシアの間でも、領土問題を解決し、平和条約を締結するための外交交渉が粘り強く続けられています。

1993年（平成5年）に合意された「東京宣言」では、領土問題を北方四島の帰属の問題と位置づけるとともに、領土問題解決のための交渉指針が示されました。

1999年（平成11年）、ロシアではプーチン政権が誕生し、2003年（平成15年）には「日口行動計画」が採択され、領土問題に関しては「日ソ共同宣言」や「東京宣言」などの諸合意を基礎に交渉を加速させることが確認されました。

2016年（平成28年）には、安倍総理大臣とプーチン大統領との間で、これまでの交渉の停滞を打破して突破口を開くため、今までの発想にとらわれない「新しいアプローチ」で交渉を精力的に進めていく認識が共有され、北方四島において特別な制度の下で共同経済活動を行うための協議の開始が合意されました。

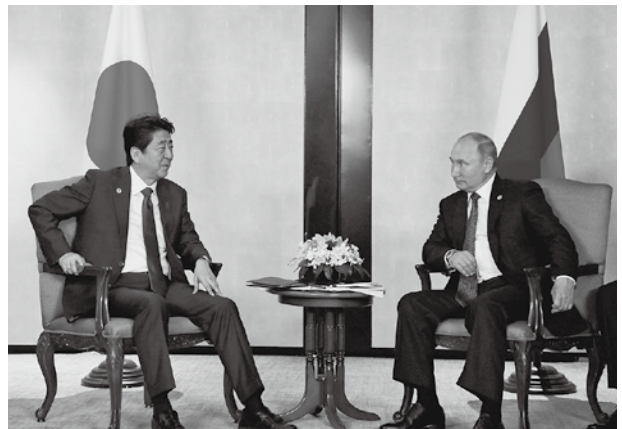
また、2018年（平成30年）11月に行われた日口首脳会談では、「日ソ共同宣言」を基礎として平和条約交渉を加速させることが合意されました。



●東京宣言に署名する細川総理大臣とエリツィン大統領（1993年）



●日口行動計画に関する共同声明に署名する小泉総理大臣とプーチン大統領（2003年）



●日口首脳会談（2018年11月14日）
出典：首相官邸ホームページ
(https://www.kantei.go.jp/jp/98_abe/actions/201811/14asean1.html)

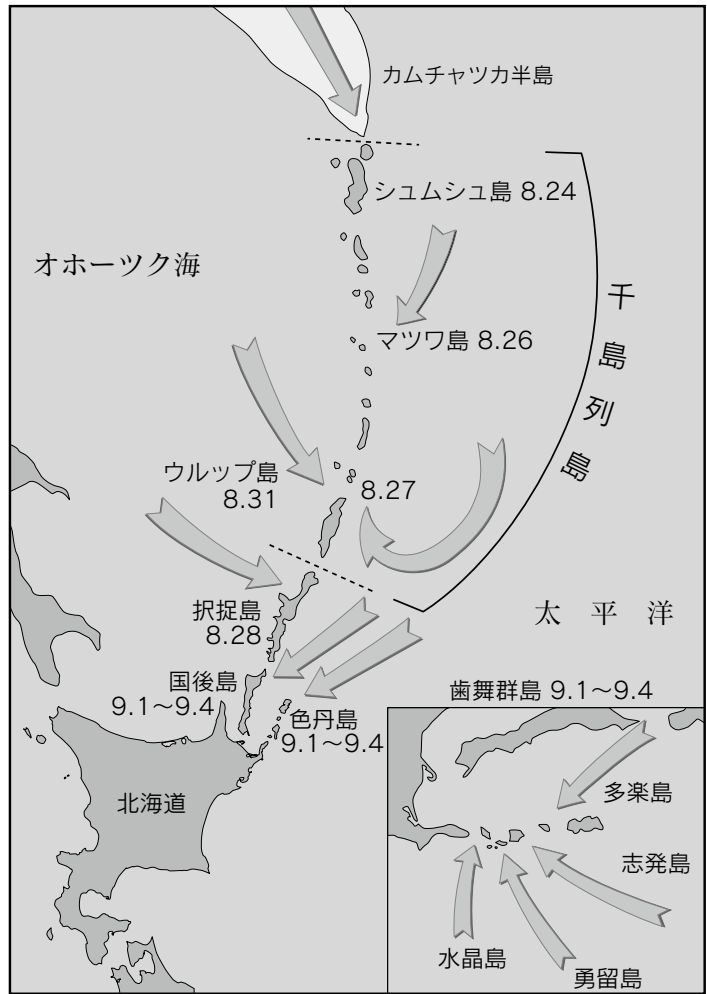
第二次世界大戦末期の1945年（昭和20年）8月9日、ソ連は当時有効だった「日ソ中立条約」（1941年締結）を一方的に破棄して、日本に対し宣戦しました。ソ連軍は、第二次世界大戦終了後の8月18日より千島列島への攻撃を開始し、8月28日に択捉島に上陸、次いで国後島、色丹島、歯舞群島と、遅くとも9月5日までに、これら四島をすべて占領してしまいました。

その後、現在まで、これら北方四島は、ソ連（現在のロシア）に不法占拠された状態が続いています。

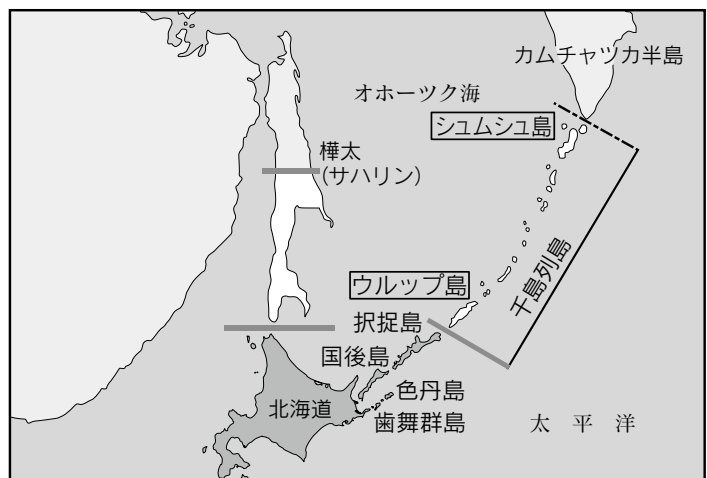
1951年（昭和26年）、日本は「サンフランシスコ平和条約」に調印し、千島列島と南樺太を放棄しました。このとき、日本が放棄した千島列島とは、ウルップ島から北の島々のことで、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四島は含まれていません。

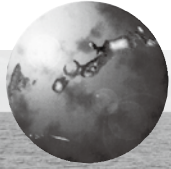
ソ連が「サンフランシスコ平和条約」に加わらなかったため、日本とソ連は、1956年（昭和31年）、「日ソ共同宣言」に署名し、国交を回復しました。「日ソ共同宣言」では、領土問題について、平和条約締結後に、歯舞群島と色丹島を日本に引き渡すことに同意しています。

●ソ連の不法占領



●1951年のサンフランシスコ平和条約に基づく国境線





北方領土の国境はどうなっているの？

1855年（安政元年）、日本とロシアの間で「日魯通好条約」が結ばれました。この条約で、両国の国境が択捉島とウルップ島の上に定められました。ウルップ島から北の千島列島はロシアの領土、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四島は日本の領土であることが、この条約によって法的に確定したのです。このとき、樺太(サハリン)については、国境は決めませんでした。

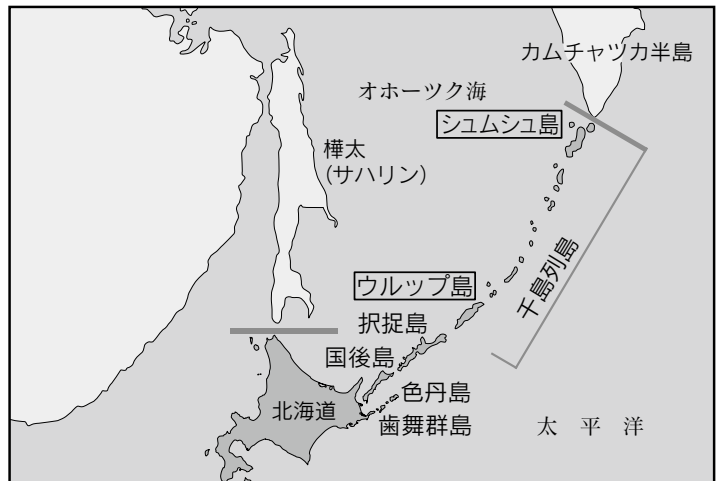
1875年（明治8年）、日本はロシアと「樺太千島交換条約」を結びました。日本は樺太での権利を放棄するかわりに、千島列島をロシアから譲り受けたのです。この条約には、譲り受ける千島列島として、シムシユ島からウルップ島までの18の島の名前が挙げられています。つまり、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四島は、千島列島には含まれないということなのです。

1905年（明治38年）、日露戦争の結果、日本とロシアは「ポーツマス条約」を結びました。このとき、樺太の南半分が日本の領土となりました。

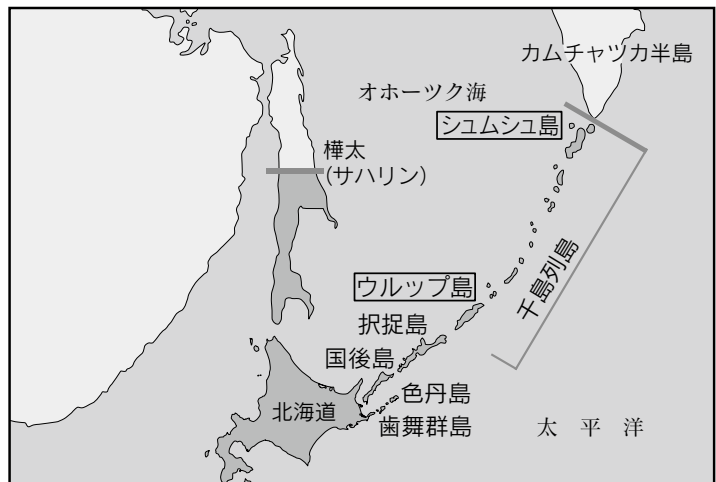
●1855年の日魯通好条約に基づく国境線



●1875年の樺太千島交換条約に基づく国境線



●1905年のポーツマス条約に基づく国境線





北方領土は日本の島なの？

日本が、北方の島々のことを知ったのは、17世紀初め頃です。

1644年（正保元年）に江戸幕府が「正保御国絵図」という地図を編さんしましたが、このとき松前藩が幕府に提出した自藩領地の地図には「くなしり」「えとろほ」など、現在の島名と同じ名前が書かれています。

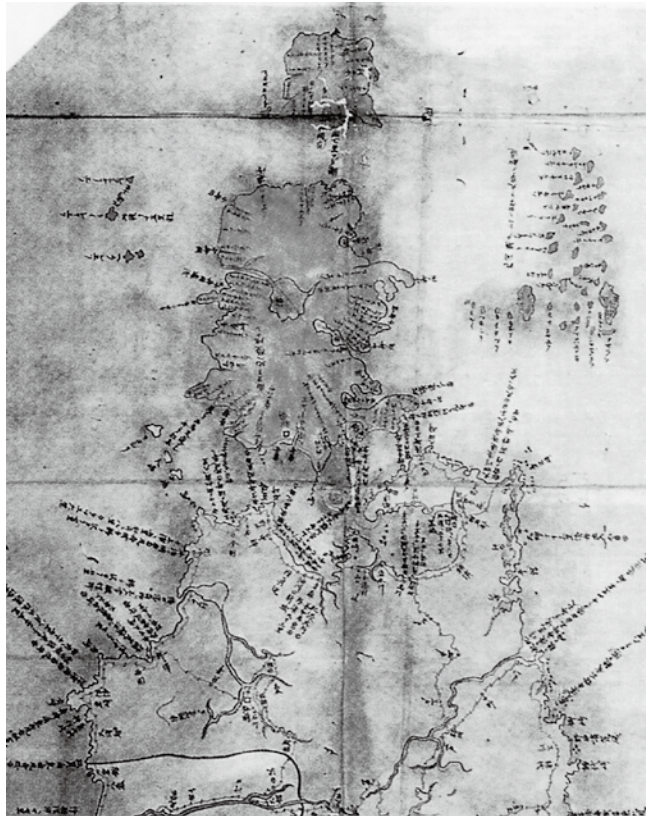
ロシア人が初めて千島列島を探検したのが1711年（正徳元年）のことですから、約100年も前から日本は北方の島々とかかわりをもっていたのです。



「大日本恵登呂府」と書いた標柱を建て、日本の領土であることを明らかにしました。

このような歴史的事実や当時の実情から考えても、北方領土は古来からの日本の領土なのです。

●正保御国絵図1644年（正保元年）



18世紀後半になると、国後島、択捉島を中心に、最上徳内、高田屋嘉兵衛、近藤重蔵といった日本人が活躍しました。

江戸幕府は1798年（寛政10年）、蝦夷地（北海道）に大規模な調査隊を派遣しました。このとき、近藤重蔵が最上徳内とともに択捉島に渡り、「大日本恵登呂

◆北方四島での人々の生活

第二次世界大戦終了後、ソ連軍に占領されるまで、北方四島には日本人が住んでいました。

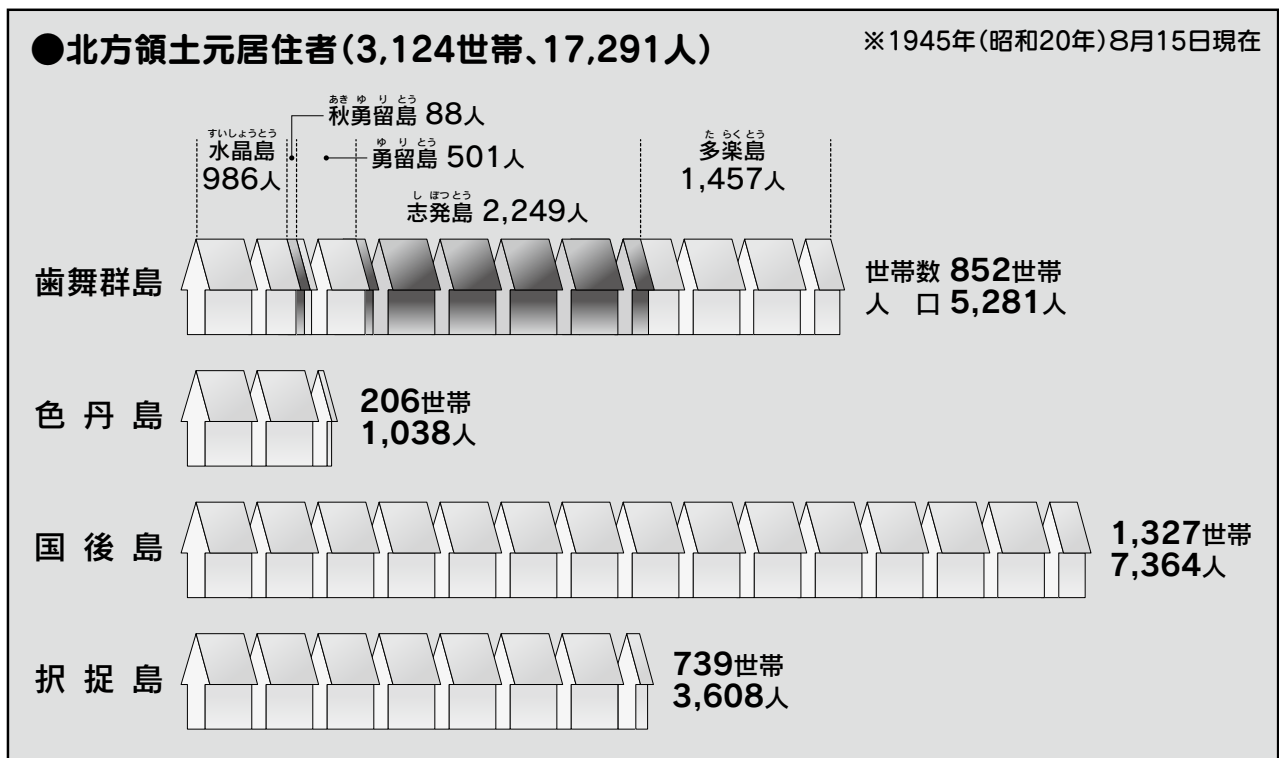
北方四島の住民のほとんどは、漁業に従事していました。はじめは親方（網元）に雇われていた人が多かったのですが、やがて独立して、家族とともに移り住むようになっていったのです。

島での住宅は、ほとんどが木造であり、風が強い土地であったことから平屋造りで小さなものでした。

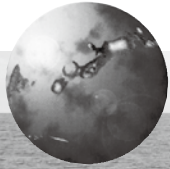
日常生活に必要なものの大部分は、船で北海道本島から運ばれてきました。そのため、輸送費がかかり、島での物価は高かったといわれています。その上、冬の間は暴風や流氷でしばしば船が来なくなり、新聞や郵便物のほか、日常の品の運搬も長くとだえることがありました。そのため、島では、食料などの必要な品物は、翌年の春までの分を秋のうちに買い入れておきました。

最も困るのは、急病人やけが人が出た時でした。島には、医者も病院も少なく、設備も整っていませんでした。そのため、急病人の手当が間に合わないことも多くありました。

このように、島での生活は、不便なことや困難なことも多かったのですが、豊かな漁場や森林などに恵まれていたため、生活は次第に豊かになっていきました。島をふるさとと決めた人々は、将来に明るい希望を持って、一生懸命に働きました。



注：平成18年3月千島歯舞諸島居住者連盟調べ



北方領土ってどんな島なの？

北方領土の中でも、国後島と択捉島には、海拔1,500mを超える山がありますが、歯舞群島と色丹島は、ゆるやかな起伏のある土地です。

北方領土には、キタキツネ、ゴマフアザラシ、オットセイ、トドなどたくさんの動物が住んでいます。国後島や択捉島には、ヒグマも住んでいます。また、エトピリカ、エゾライチョウ、オジロワシといった珍しい鳥も多く見かけます。

北方領土の周辺の海は、暖流と寒流が交わる場所であるため、世界3大漁場のひとつとなっています。特に、サケ、マス、タラ、タラバガニ、コンブ、ホタテなどの宝庫です。

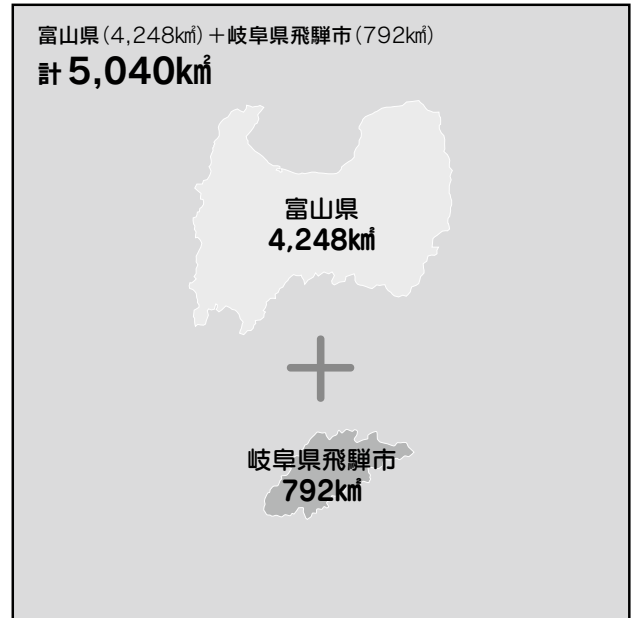


北方領土というと、厳しい寒さを想像するかもしれませんが、海流の影響のため、冬は北海道の内陸部より暖かく、雪も少ない場所です。2月の平均気温は、マイナス6℃前後です。

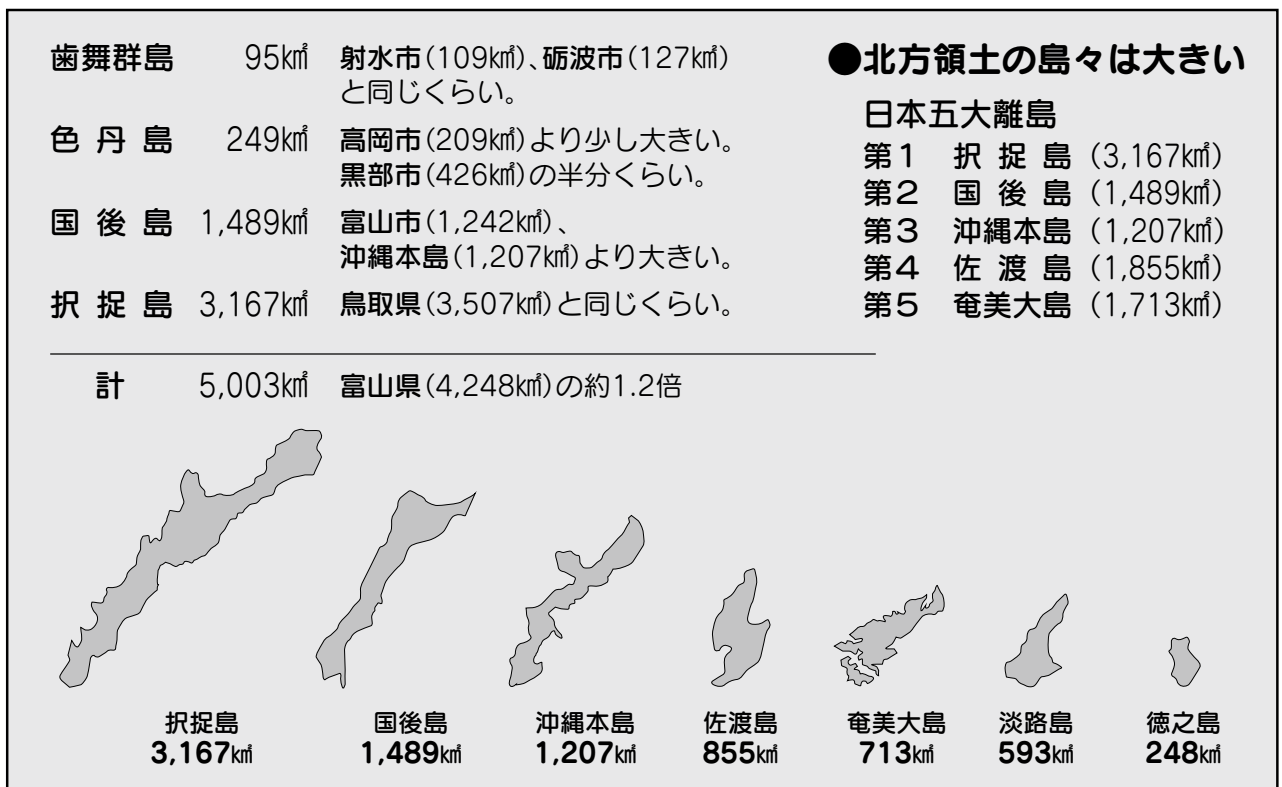
夏は、一番暑い8月でも月の平均気温が16℃で、あまり高くありません。夏は、海霧（ガス）がかかって日照時間が少ないことや、オホーツク海から冷たい空気が入ってくるからです。

◆北方領土の面積について

北方領土の面積の総計は、5,003km²で、富山県の面積(4,248km²)の約1.2倍の広さです。国後島と択捉島は、沖縄本島より大きな島で、一番大きな択捉島(3,167km²)は鳥取県(3,507km²)と同じくらいの広さです。



北方領土の面積を日本各地の島々や県・市の大きさと比較してみましょう。





北方領土ってどこにあるの？

◆北方領土の位置について

「北方領土」とは、北海道の東にある根室半島につらなるはぼまいぐんとう歯舞群島、しこたんとう色丹島、くなしりとう国後島、えとろふとう択捉島の4つの島々のことです。これらの島々は「北方四島」とも言います。

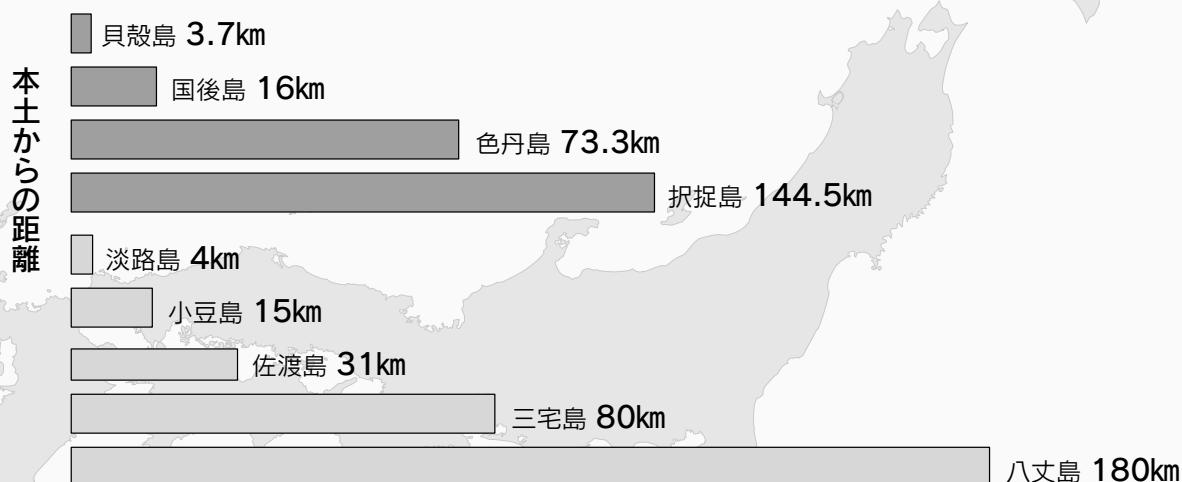
北方領土はとても遠い場所だと思っているかもしれませんが、最も近い歯舞群島の貝殻島までは、北海道本島からわずか3.7kmしか離れておらず、望遠鏡で灯台をはっきり見ることができます。

また、国後島までは16kmで、本土と佐渡島との距離（31km）の約半分です。色丹島までは73.3km、択捉島までは144.5kmという距離です。北方領土とはこんなに近くにある島々なのです。



●こんなに近い北方領土

最も近い歯舞群島の貝殻島は、納沙布岬からわずか3.7km、一番遠い択捉島までは144.5kmです。



參考資料

第15回「私たちと北方領土」作文コンクール入賞作文集

令和4年3月発行

編集・発行 北方領土返還要求運動富山県民会議
富山県「北方領土問題」教育者会議
(富山県経営管理部総務課内)
富山市新総曲輪1-7 ☎076-431-4111(代表)

印刷所 株式会社すがの印刷
